日本書紀傳

六巻下

和書
一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (19)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
淵邸文庫
淵邸文庫

日本紀傳六下
紙数二葉と数 安西蔵書

の雄元ハ似たるを以男柱とハ云あり○思欲以吾身元處合汝身之元處ハ吾身雄元之處汝身之雌元之處と云を約めたるなり其ハ第一一書ハ此事を思欲以吾身陽元合汝身之陰元と有を以知べし古事記ハ故以此吾身成餘處刺塞汝身不成合處而以爲生成國土矣何と有て殊ハ委曲しく者あり然るを舊事紀ハ先ハ右の如く記しあげ後ハ思欲以吾身成餘雄元之處刺塞汝身不成合雌元之處以爲産生國土如何と再出せるハ御紀を取合せて文を成せる物なり甚だ叢脞しく心ちす 合とハ次ハ陰陽始遘合爲夫婦と有る事ハ古事記ハ刺塞と有る其同じ事を爲御合とも御合とも記中ハ多く是あり又此第五一書ハ將合交と有ハ身合

内一二六八三號

みて身と身と交ふ合すを云ふなり猶上ふ共爲夫婦の下ふ委しく云
わが今更ふ云
べき限ふ非ず

於是陰陽始遘合爲夫婦及至
産時先以淡路洲爲胞意所不
快故名之曰淡路洲廼生大日
本日本此云耶麻騰下皆效此豐秋津洲次

生伊豫二名洲次生筑紫洲次
雙生隱岐洲與佐度洲世人或
有雙生者象此也次生越洲次
生大洲次生吉備子洲由是始
起大八洲國之號焉即對馬嶋

壹岐嶋及處處小嶋皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也

陰陽始遘合ハ陰神陽神始氏遘合志氏ト訓ベシ其ハ正書一書共ニ然ト有ヲ此ニ限リテ賣袁ト耳云ベキニ非ザルベカラザリ然ラヲ釋秘訓ニ私記曰師説讀陰陽始遘爲雌雄初合也合爲夫婦與上同也ト有ハ二共ニ誤れり遘合の字を分て一ハ上ニ一ハ下ニ附ても義ハ通ゆるが如くなれども實叙出現章ニ乃相與遘合而生

合ハ一書ニハ合爲夫婦ト云ヒ美斗能麻具波比ト訓リトル此ハ

有を如何ニさら爲む又遘を阿比氐ト訓ト合爲夫婦を上ト同ジク訓テハ合ト合ト重復れトバ然ハ訓べからざるなり私記の右文ニ次テ安氏説始遘合二字字舊説又有ト同ニ安家者也ト有れバ讀美斗能麻具波比爲夫婦三字讀如本古人も然ハ有まじき者ト爲なり始遘合ハ一書トハ違ひて此ハ第五書ハ陰神の先言ニ給ひし時ニハ遘合ニ給ハざりし趣ニ傳たる故ニ始トハ有なれども實ハ第一一書及古事記の如く此度ハ再度なるなり然ラヲ舊事紀ニハ先ニ此ト同ジク記しながら再度のみも於是雌雄初會云ト云ハ拙き事なり先なるを始ト云ハバ此ハ後なる事云も更なる者なり古事記ニハ女人先言不良雖然久美度迩興而生子水蛭子云ト有レバ先ニ始て遘合し給ふ事著き物なり此ニハ蛭兒を神トして四神出生章ニ收り又淡洲の事ト淡路洲の事ト一

か成れとハ始と
ハ置れたるあり遘合ハ上か欲共爲夫婦産生洲國と
見えたる其欲(オモ)ハしい事を此かて行ひ給へる者なり
然れば遘合の字と共爲夫婦とを同じく美斗能麻具
波比と云事允か當れる事ありけり共爲夫婦ハ字の如く遘合の字ハ
易か天地絪縕万物化醇男女構精万物化生乾道成男
坤道爲女乾知大始坤作成物と有を取られたるあり
○爲夫婦ハ(美)伊毛勢登爲給布と訓べし其ハ第十二書(一第十等の)
か爲夫婦を麻具波比志氐と訓たる同じ字をこゝろハ
用ゐるとかけれ上か遘合の字有る上ハ必佗か訓べ
き言の有あり古し(此の爲)夫婦を袁登賣登那流と有ハ夫と
婦(人)と成ると云事なる可きが上の陰陽ハ二神の唯男

女あるを云ふハ此ハ正しく夫妻と成給へるか叶へ
れども上か以女此云鳥等咩と有か(言の)混りハしければ
猶此かても非ざるあり夫婦と爲を俗か賣袁登成
れば其を交して袁登賣と成ると云ハ夫婦人か成と云事ふ
れども餘りか聞着ぬ語なり和名抄か夫猶扶也以道
扶接也和名手乎止一云手止古と有る手字止ハ手此
止の音便なり又妻和名未妻者齊也與夫齊體也又用
夫妻婦妻一云未阿波須と有る此二を寄せ合せてハ袁登賣袁登賣とも云べし鎮火祭詞
か神伊佐奈伎伊佐奈美る命妹妹二柱嫁繼給氐國能
八十國嶋能八十嶋子生給氐云ふと有ハ神語の仕か
載るれたる者かに有れば夫婦を妹妹の言の如く訓
めるむるハ叶ふ可らざりけれ其ハ古事記か字比地

今案行天皇四年御紀
か夫婦之道古今達則也云有る夫婦と
袁比登と賣と訓たハ
未嫁ぎる前か唯か
男女あれること已か嫁
てハ女か夫の者あるを故
か夫人の妻と云事
あるる可くや

神次妹須比智迩神より伊邪那岐神次妹伊邪那美神
ゟ至迄ゟ女神の方ゟ妹と有れば男神の方ゟ夫ゟ
事云ずして著き者ゟり〻し四神出生章ゟ陰神ゟり
陽神を吾夫君と宣ひ第九一書ゟ吾夫君尊と有を
前ゟ吾夫君此云阿我儺勢と注し又陽神より陰神ゟ
事を汝妹者とも吾妹とも宣へり正しく我那迩妹
命と記されたり那迩妹の迩ハ上ゟ憙哉又妍哉ゟ
美麗しきを申せる由已ゟ云ゟ如し夫婦を妹妹と
云事ハ万葉六ゟ不言問木尚妹與兄有云辛云〻七ゟ
木道ゟ社妹山在云櫛上二上山毋妹許曾有來又妹ゟ
恋余越去者勢能山云し又麻毛吉木川邊之妹與背之
山又並居鴨妹與勢能山又大兄道ゟ御神作妹勢能山
見吉ゟど其外ゟも多在り（然れば古ハ夫婦の事を専妹妹と

△名義抄ゟ妹妹を伊母勢と訓り

云ゟり〻ゟ猶鎮火祭詞の講義ゟ云り妹と云義ハ弥身ゟる可し女ゟ
男を主とし其ゟ順ひて世を經る者ゟる謂ゟり身を
毛と云事ハ〻も万葉九三十ゟ六丁ゟ如己男と有ハ如身男
ゟるを以知ゟる古事記須勢理毘賣命の御歌ゟ阿波
毋與賣迩斯阿礼婆那遠岐氐遠波那志那遠岐氐都麻
波那斯と詠せ給へる女を男をし夫と定めて其ゟ
順ふ者ゟれば男の方より親しきて弥身と云ゟる
ゟ記傳三ゟ記中の例兄と妹と、ゟれば妹をば妹某と
云ひ姉と妹と、ゟれば弟某と云て妹と云ず然れ
ば女と女との間ゟてハ妹と云事上古ゟハ無ゟり〻ゟ
ゟ」と有ゟ如く兄と妹のゟ妹と云ハ女ハ一身を以て
立難き者ゟる故ゟ夫ゟ婚するゟも何ゟも兄ゟる人
の後見ゟ依ゟ事故ゟ其親しく後見すゟ意を以て古

ふ妹とハ云ひしあり委しくハ傳五妹ハ狹兄と云事
塗土煮尊沙土煮尊の下に云ひ
の約ひ云ふあり女の方よりハ萬事其夫を頼もしき者
あるして其一人を傳づく者ある事右の御歌ふ汝を除
て男ハ無しと云意ふ詠出させ給
へるを此ふも引て心得べし狹ハ狹衣狹莚など云狹
ありて他を顧ずして一向ふ其物を指云辞あり兄ハ先
ふ長ひる由あり古事記ふ女神の所ふハ次妹と有ふ
對へて知べし兄猾弟猾兄磯城弟磯城兄比賣弟比賣
と云名紀記共ふ見えたるを以知べし然れば狹兄を
合せて妹と云名ふハ成たるあり俗の人の長の高低を云ふ勢の高し低

しと云ひ山の峯傳ひの所を勢續と云ひ皆を勢と云
も同等の言あり此を以て男ハ女の上ある謂を以て
狹兄と云べきを約めて
勢と云ふを曉る可し○及至産時ハ御子産須時ふ
至色と訓べし上ふ産生洲國と有る其事を今成給ふ
事あり此の産字を古字年と訓るハ然る可し古事記
ある伊邪那岐命の御言ふ吾者生生子而於生終云し
と有る御子生の始あり仁德天皇五十年御紀ふ箇刺
古武等儺波企箇輸耶と也箇利古武等和例破枳箇儒
と有る古武ハ子産の引合あて此の産字の訓と同ト
字の如く至ふ及色と訓ハ漢風ある義ふ關くぬ事
ハ何方迄も清く麗ハしく有べき事今云限ふ非ず
○先以淡路洲爲胞と有る淡路洲の名義ハ次て說べ

（第十一書ハ陰陽先唱曰妍哉可愛又男子云ヒ遂ニ夢ヲ婦生淡路洲次蛭兒ヲ有ハ淡洲の僻傳ナリ）

ヽ爲胞ハ異說有あり第六ノ一書ハ先以淡路洲淡洲爲胞生大日本豐秋津洲第八ノ一書ハ以磯馭盧嶋爲胞生淡路洲第九ノ一書ハ此と同ドく以淡路洲爲胞生大日本豐秋津洲と見えたる何れも淡路洲を云ひ舊事紀も此正書と同ドきハ此より取れる故あり古事記ハ更ハ此事見えず爲胞と云事甚ヽ謂れ無ヽ胞衣ハ兒の胎中ハ在る時ハ眞床覆衾の如く此を裹て日足す器ハとして有ければ已ハ兒の胎を別れて生れ出れば共ハ出ヽ雖も彼ハ活物此ハ死物と成て何の用も立さる者あり此と第九ノ一書の趣ハ淡路洲ハ大日本豐秋津洲を生給ひヽ其時の

（撰述義ハ私記曰ク人之產時有胞衣者也是初產之時先出者也ハ二神ノ意謂自產高大之洲而不意之外先生ハ蛭兒ハ深醜也云ヽ故假之爲胞ト云ふハ强事あり）

胞衣ある意ある可けれども胞衣の出るハ自然の事あるを爲胞と云ふハ大ハ義違へり然れば子を產ハ必有べき事と心得て最初ハ生れたるハ胞衣あるヽむと杜撰（ツクリコト）せヽ中世の誰やヽ人の按意より斯ク謂れ無き事ハ言出せりけむ若くハ天皇記國記などの蘇我の家ハ在ヽ時ハ加へたるハも有べヽ舊事紀ハ後ハ紀記を輯めて書る者ハ論ひ無を此ハ一書と共ハ四所迄有ハ近江宮以前ハ成りむ其中ハ淡路洲又淡洲などハ强事ハも有ヽ事あるヽれ然云ハヽ云ハる可を先ハ凝成ヽ以磯馭盧嶋爲胞あるヽハ餘りハ如何ある事あり然れば爲胞ハ最初ハ出來れるハ子長ある由を以て大日本伊豫筑紫等

の大なるも有れども淡路洲を子長と爲給ひしを以
淡路洲爲兄(エ)など云傳へたるを言の同じく任か兄を
胞と誤れるなり次か所不快云々あるもの言も添たる
者なり可し　其か此より前か成れり磯馭盧嶋かも
爲胞と有ハ餘りか懸放れたる事故か此
考かも及びたるなり寔か彼嶋かしも國土の始なれ
バ爲兄とも云べき狀なり古事記か伊豫國謂愛比賣
と有を此なてか兄姫とも
書所なるを思合す可しム　○意所不快と景行天皇四
年御紀か妾性不欲交接之道今不勝皇威暫納帷幕之
中然意所不快と有る終の四字此か同じく共か先か在
し事を後か悔む意なり然れバ御心か快給波邪理伎
と云べし此か陰陽神不悅曰云々の事を此か響ク也

又下なる淡路を舊事紀と同じく吾耻の意か持込む
ものの結構なり但此意所不快か二有り淡路洲ハ胞
なて有し故か快び給ハざるなり又ハかくて意か快給
ハざるなれども其かても吾耻か運ぶハ全く古傳
か非ず中古人の態なる可き事右か云るグ如し但斯迄か
云を古人を輕蔑すとや人ハ思ふしむを己グ心か然
しず學ハ物を正しく爲をこと旨とハ爲なる事實か
叶ハざる事を道の爲か辨正
さむか誰か憚る事なハ有む　○故名之曰淡路洲の故
ハ意所不快より受たるなり舊事紀か故曰淡道洲即
謂吾耻也と有る心得られ此時ハ天地の初時か
て國土なてハ二神より外か神も何も物ハ無か誰グ

心を思憚らせ給ひて吾耻とハ宣ハさむや此二説共ハ決て神代の古意ハ非らすあり四神出生章第六一書ハ伊弉冊尊恨曰何不用要言今吾耻辱第十一書ハ伊弉冊尊耻恨之曰云〻時伊弉諾尊亦慙焉天孫降臨章第二一書ハ故磐長姫大慙而詛之曰云〻木花開耶姫甚以慙恨乃作無戸室云〻海宮遊行章ハ豐玉姫云〻甚慙之曰如有不辱我云〻あむ何れも人ハ對ひての事なるあり耻ハ竟と同〻く其事の極ハ至りるハ心後ろくを云ふ

○淡路洲ハ古事記ハ如此言竟而生子淡道之穗之狭別嶋と有るハ是あり但其も生子淡道嶋亦名謂穗之狭別と有べきを後ハ淡道と云名と神代ハ穗之狭別と云名とを一ハ連ね云るあて他例と異なるあり万葉三ハ栗路と作り應神天皇二十二年御紀大御歌ハ阿波旎辞摩と有れども其ハ歌詞ふれハ能と云べし万葉十五ハ安波治乃之麻波と有り鈴屋大人の淡道ハ栗國ハ往路ありと云れハ然る言あるハ就て猶思を深むるハ凡畿内より西海道ハ下るハ播磨國を以道口と爲を南海道ハ紀伊淡路を經て伊豫二名洲ハ其道の極あるを阿波ハ也も其道口あり有れバ此豐秋津洲と其伊豫二名洲との間ハ在る由を以て如何ハも栗路とハ云べき地形あり古語拾遺神武天皇段ハ仍令天富命幸日鷺命之孫求肥饒地遣阿波國殖穀麻種と也有れハ既く彼國ハ開けて有しあれバ淡路ハ其往來の路次ある由を以て然云るあて阿波を主と立て淡路ハ

△口訣ハ八洲各有國魂即洲成之精神也と有るが如く

○但私記ハ生大洲者即生其神也と有ハ誤あり下ハ云べし

其ハ聯れる小嶋ある由なる可し其ハ次ハ生吉備子洲と有ハ吉備國を主として其ハ屬たる子洲なる事其ハ云るが如し万葉六ハ日本道乃吉備兒島と訓るとも其兒島を日本道とハ云るかて此と同じ又万葉九ハ百傳之八十之島廻乎搗雖來粟小島者雖見不足可聞と有ハ粟島ハハ有べからず粟國ハ對へて淡路を小島と詠り者と見えたり穂之狭別と云ハ亦名ハハ非る可し其國と共ハ生坐て其國を世と共ハ主領と坐す神の御名なり然れば淡路なる云國名ハ又代ハ成ての事なりけれ神代ハハ右の如く穂之狭別島又ハ愛比賣國飯依比古國なる云ゆへ。穂ハ神功皇后御紀ハ幡荻穂出吾也と有る穂なて物の顕れ出る謂なれば右ハ云る如く大八洲國の兄として初て

△万葉六ハ御食向淡路の島と續けたるハ御食向ハ粟と云事なて唯發語の如く見ゆる物なり同巻ハ御食都日之御調等淡路乃野島乃海子乃とも三食津國野島乃海子乃なども其國と直ちハ御食都國と云るハ由有る事なり大忌祭詞議義ハ云り

現出たる由なり狭別ハ字の如く狭ハ(せまの十七)かく別れたる義なるなり此等ハ記傳ハ説れたる如くなる物なる事の因ハ云事なり物の牙し見ゆるを保能と也保能加と也保と能しとも云ひ又上枝を保都延なと云ふ保なり○生大日本豐秋津洲ハ一書共ハ異説無し古事記ハ生大倭豐秋津島亦名謂天御虚空豐秋津根別と有る亦名ハ神代なりの古名なして國名ハ例の如く久世ハ至て成れるなる事下ハ云が如し又生出たる次序も大八島の最後ハ在ハ甚く宜しきを此の傳くなて八第一一書ハ大八洲の最初ハ在り又ハ淡路洲の次ハ在り淡路洲淡洲の次ハ在など異説種くなり大凡淡路洲の次ハ在て伊豫二名洲の前ハ

今こゝに有る日本の字は大化元年の詔書に神祇官に日本天皇と初て用ひられたれとも其ふは未た夜麻登と云訓は無りしあり所以ふ此

か在る事あれども右か說る如く淡路と云も粟か往く路ふるか思寄るか先淡路次か伊豫次か筑紫次か壹岐次か對馬次か隱岐次か佐度と巡生給ひて而して大日本は生給べるふ可を八洲の說か異同有れば下か云べきあり大日本の下か日本此云耶麻騰下皆效之と

有ハ國號考四十五丁か夜麻登と云か日本と云字を用る事は書紀より始れり其は未例無き事かて世人の惑ふ可き故か其訓注は有ふり古事記は大化の年より遥か後か出來つれども總ての文字も何も古く書傳へたる仕か記されて夜麻登かも皆倭字を耳書て日本と書れたる所は一も無を書紀は漢文を潤色り字を撰ひて書れたる故か新か此嘉号を當て書れたるふり但畿内の一國の夜麻登か多く倭は書き天下の大号のかは日本と書き又一國の名の時かも公か係れるをば日本と書れて紀中大凡此例あり人名も此意味かて天皇の大御のかは日本又然〻ぬ人のかは倭と書れたり神日本磐余彦天皇倭姫命ぢの如し日本武尊は天皇の大御父か坐て萬事天皇と等しき故か日本と書れたるあり」と有ゞ如し又比能毋登と云号は古の書か見えず日本と云は意は其意ふれども本異國へ示きの爲か設給へるあれか比能毋登とは訓ず始より爾冨年と宇音かゞ云ひむ万葉集か日本と訓有を比能毋登と訓る所多在は後人の强て五言か訓む爲の僻事かして皆四言か夜麻登能と訓べきあり唯三卷ふる不盡山の長歌か日本之山跡國乃云と

有と續後紀十九卷興福寺僧の長歌ハ日本乃野麻臺
能國遠云〻又日本乃倭之國波云〻あどし有る此等
ハ比能毋登能ゐり然れど國號ハ云るハ非ず倭と
云む枕詞ゐりと云れたる其日本と云ハ異國へ示さ
む爲ハ設しれたるハ有れども平田翁の赤縣度制
考ハ日本の字ハ軒轅黃帝記ハ桑黃と云獸の事を出
日本國壽三千歲と見え梁の任昉が述異記ハ日本國
有金桃　其實重一斤あども見えて彼國より皇國を
尊稱せる名ゐり又日下とも云ひ然るを旧唐書ハ倭
國自惡其名不雅改爲日本と云ひ新唐書ハ日本古倭
奴國也云〻惡倭名更號日本ゐどと云るハ彼が私事ハ
ゐり倭ハ山海經海内北篇ハ蓋國在鉅燕南倭北倭屬燕
と見え王充論衡ハ周時倭人貢鬯草と有る倭ゐるが
山海經ハ朝鮮の地方ハ擧たる如く燕ハ屬せる一
小島ゐり然るを前漢地理志ハ班固惑ひて闇推ハ皇
國の事と定めたるがゆ後漢書魏志ゐどハ其誤を受
たゆ倭奴國を皇國の事と爲しも彼が私ゐり後漢宋
夷傳ハ倭在韓東南大海中依山島爲居凡百餘國云〻
光武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之
極南界也光武賜以印綬と有を魏志倭傳ハ至末盧國

東南陸行五百里到伊覩國と有ハ倭奴伊覩國ト〻し
て筑前國怡土郡を云ゆと云れたる如くゐれば倭奴
ハ皇國の事ハ非ず極南界の一僻地を云事右の如
し委しくハ本書ハ就て見べし今ハ要と有る條〻を
拔出て文ハ予が綴りて引るゐり又同書ハ夜麻登と云ハ本畿内ハ
る大和一國の名ゐるを神武天皇此國ハ大宮敷坐ゆ
しゆりして後の御代〻の京も皆此國内ゐりける
故ハ自天下の大名ハも成れるゐり云〻又生大日本
豐秋津洲と有ハ天下の大号ハも成ての後の世ゐり
云る語ハして神代の當昔の言ハ非ず抑神代ゐり
大八洲國葦原中國ゐと云〻ハ其号を擧ずして生大
日本と〻しも云るハ如何ハと云ハ彼二の号ハ八洲を

揔たる大号なるか其中の七洲を除きて一洲を云所
あるべきあり若て此一洲の大号ハ無故か姑く大日本
とハ成りり夜麻登ハ一國の名なるが天下の大號か
も成り又一國の内のみて別て京師を指ても云て廣く
も狹くも用ゐ〻号なるが故なり其ハ筑紫と云も
伊豫と云も一國の名なるを九國四國の大号かもし
て筑紫洲伊豫二名洲なと云る例か同し又狹野尊云
し後撥平天下奄有八洲故復加号曰神日本磐余彦尊
と有る文の狀ハ天下の大号を取て称奉る如聞ゆれ
ども此も皇京敷坐る國名を取りる大御名なり崇神

天皇御紀の歌か椰麿等那殊於明望能農之能と有る
大物主神ハ天下を經營成給へりしかバ此椰麿等ハ
大号の如く聞ゆれども云く此ハ意ハ天下を云る
なれども言ハ猶一國の夜麻登なり若て漸く打任せ
たる天下の大号かも成りりと見えて仁德天皇御紀
鴈の卵生る事を武内宿祢か問せ給へるかも答申せ
る歌かも阿蒼豆辭葬椰葬等能區珥と有り鴈の産む
事ハ凡て皇國のみてハ奇なれバ此椰葬等ハ正し
く天下の大号なり取て意と見えたり（但其時未天下の大号ハ有べからず此大洲の名なり天下の大号と成りし事ハ孝德天皇の御世ふる事下ふ云る如くなり）此りて日本の義明
らかなり右の七洲か各名有を此一洲の大号ハ無き
故か姑く大日本とハ云事なれども猶能考

△釋述義ハ引ル私記ハ大日本又秋津島等の說有て且次ハ如此之名字上代雖未得其号以史書撰述時之名字載ル者倭漢之例也云〻有る思ハ可一

ルハ右ハ引ル古事記の亦名謂天御虛空豐秋津根別と有ハ此一洲の名ハて有一ハ其事下ハ云べ一△豐秋津洲の豐ハ本大地の動くハ起りて其ハ物の豐饒ある意ハ轉用ふる事傳三豐斟渟尊の下ハ註せるが如一秋津洲の事ハ國號考二十ハ四丁ハ云く古事記ハ大倭帶日子國押人命坐葛城室之秋津島宮治天下也と見え書紀ハも此御巻ハ二年冬十月遷都於室地是謂秋津嶋宮と有て本此孝安天皇の都の地名ある彼神武天皇の皇輿巡幸因登腋上嗛間丘而迴望國狀曰妍哉乎國之獲矣雖內木綿之眞迮國猶如蜻蛉之臀呫焉と詔へり一ハ即此地の事ハて彼大詔より起れる名

ある腋上も嗛間丘も室も皆相近き地ハて大和國葛上郡ある備孝安天皇の百餘年久一く敷坐ハ一京師の名ある〻〻秋津島倭と續けて云做ひ其倭ハ引れて終ハ天下の大名ハも成れる事ある然るを國狀を御覽じて蜻蛉の臀呫せる如一と宣へるを或ハ天下の事と一或ハ大和一國の事と爲るる〻此秋津嶋と云ふ名をも然心得めれども然ハハ非ず 倭雄略天皇の吉野ハ幸行一時ハ蛇の御腕を咬れる時ハ蜻蛉飛來りて其蛇を咋ける時の大御歌ハ手臑ハ蛇搔著き其蛇を阿岐豆速咋ひ如此名ハ負むと空見倭國を阿岐豆嶋と云と詠せ給ひ其ある其地を阿岐豆野と號けれ一事古事記ハ見えたる此御歌の意ハ古より此倭國を秋津島と云事ハ今如此く其名ハ負て蜻蛉ど功有むとてある

と詠成し給へるもあれば秋津島の事かハ預らず然るを書紀かハ此御歌の詞這虫も大君か順ふ汝か形ハ置む秋津島倭と有り此ハ即汝か名か負る此秋津島倭國か形を遺し置て此を蜻蛉野と號けむと宣ふ意あるも可し然れども能爲ずハ此時の蜻蛉の功か依て國名を秋津洲と號け給へる如く聞えて混れぬべし

偖又秋津の事ハ古事記書紀万葉あゞ古書か數多出たる假字かハ皆阿岐豆と濁音の豆を耳書て清音の假字書るハ一も無し後世か清て訓ハ訛あり虫名も同ト又此嶋を洲とも書るか就て阿岐豆須とも云ハ殊か僻事あり洲字ハ須か用ふるハ常の事なれども秋津洲り時然云事ハ例も無く理も叶ハぬ事あるを

や摘要と有ハ悉く謂れなる言あり但次か云ふ古事記の豐秋津根別の津ハ清言ゆて秋津の意別ふ偖右の古事記の天御虛空かと先心留置べきあり此一大洲の名かして右か大豐秋津根別ハ神代より此一大洲の名かして此ハ淡日本豐秋津洲と云るとハ言義大か別かして此ハ淡路洲より始て次くか洲國か成れりと雖も何れも然計り大なる非かけるを弥竟か至て此大日本を生給ひて滄溟か滿憚かりしかば天御虛空か大なる顯國の現れ出たる由あり彼浮嘗の如くして漂蕩へかり物の國土と形容かければ此内か住事ある故か大虛ハ其外なる由を以て曾良と云語も此か成て國名かも負る事とハ成れりしあり

（此大日本の大虚か天進り顕はなる由なり）

物若葦牙生於空中とも有物若浮膏生於空中とも有るは其か曾良と云事を云るを見合せて曉る可なり

天御虚空ハ記傳五二十か万葉五三十二丁か久堅能阿麻能見虚喩十六十下か天三空者十二十八下か天水虚尓ふと有を引て阿麻能と訓れたるハ然る言なり此大日本出來て大八洲國定り此を基本なりて大地萬國成て顕國ハ立なりるハ此を内と云て其外を曾良と云事の出來て此か成れなり言を以名か負るなり万葉十五

か安米都知乃曾許比能宇良尓と有を以知べし記傳か此名ハ天照大御神の所知者高天原か進りへて天皇の京師をも天と爲る故か其意以て称しかとや有む又彼虚空見倭と云方語の由ふどかもや有むと云われなる其か非なり其等の事を待給ハすりて此洲の生れる即號け給るなり豊秋津の豊ハ

例の如く秋津ハ万葉六四十三丁か明津神吾皇之と有る明津か同ト（アラハ）く顕明なる由なり四神出生章第十一一書か顕見蒼生此云宇都志枳阿烏此等久佐賛叙出現章第六一書か顕此云于都斯と註り中臣壽詞かハ天か對へて宇都志國と云る如く此國土を生成給へり一二神も天浮橋か天降坐り初ハ隠身か御在りを此顕國の出來るか隨ひて顕身と成給へり如く國土も未漂蕩へり程ハ幽眞（カミヨ）なるを今如此大八洲と成れるハ顕明（アラハ）なる世と成れるなり阿伎都の阿伎ハ宇都志か同ト都ハ常か之か通ふ辞と爲る事かハ有

わるも予ハ既く處の義なる事を曉かして祝詞講義か
説る如くなれハ此の秋津ハ明處(アキド)にして顯國と云か同
じく右の天皇を明津神と申奉るも顯國之神と申す
事ふて幽冥の神か對へ奉れるなり出雲神壽詞及中臣壽詞か明御神
の御事を註せるを見べきなり又此の秋津の秋ハ借
字なる事又津の清て唱ふ可をも曉る可し記傳か豐
秋津ハ秋津島か依れりと云れ
たるハ邂逅か考漏されしなり根別の例古事記か日
向國謂豐久士比泥別と有り根ハ國土の事なり万葉
三二十四丁又二十五丁か大和國の事を山跡島根と云る是ふ
り神名の大名持命も國土を持坐す由なり此等の事
傳四五十六丁神名の下か註せるか如し然ればハ右の根別

ハ名別みて土地を別たせ給へる由なり斯ればハ此大
洲の古名ハしも其國魂神の神名を兼て天御虛空豐秋津根別と云事なり
を後ふハ簡易なる名を用るるし例かて彼一國の大
和の地名を數演(ノベ)して此大洲の名を假ふ大日本豐秋
津洲と號けて八洲の一か計へたりしをも後ふハ其
名を大八洲を摠たる名とも成れりし者なりけり此を
以見るか大日本も秋津洲も師木島も此大洲を假ふ
称事なりしを何れの称なるも大八洲の凡てふ云事ハ
彼大化の頃ふ明神御宇日本天皇なるとい別ふ日本の
字を設て詔有しなりの事を所思ふ然ればハ右ふ引る
國號考か大日本と云名已か仁德天皇御世か天下の
大号か成れる由か云れたれども猶其より後なる事
右か云る○次生伊豫二名洲古事記か八次生伊豫之
ゲ如し

二名島此島者身一而有面四毎面有名故伊豫國謂愛
比賣讀岐國謂飯依比古粟國謂大宜都比賣土左國謂
建依別と有る舊事記ハも此文を引て右の如くあり
但愛比賣の下ハ西南角飯依比古の下ハ西北角大宜
都比賣の下ハ東北角建依別を速依別ハ作て其下ハ
東南角と記せるハ其方位の大凡を云るあり此洲を
第六の一書ハ唯伊豫洲と書せるハ然も云へふこと
万葉三ハ海若者靈寸物香淡路島中ハ立置而白浪乎
伊豫ハ回と有も此一洲を凡て云る事記傳の説の如
伊豫の事次ハ説べし二名洲ハ記傳五四丁ハ名ハ借
字ハて二並あり(應)神天皇御紀の大御歌ハ阿波施辞摩
異椰數多耶羅弭阿豆枳辞摩異椰數多那羅弭豫呂辞
枳辞摩之麼と有る此ハ淡道と小豆島と並べるを詠

給へるあて此の二名洲の事ハ非ねど二並てふ言
の證あり万葉九二十二丁ハ二並筑波乃山と也有り此島
ハ飯依此古と愛比賣と女男並び建依別と大宜都比
賣と又並へるを二並(アタナ)と云り万葉六三十六丁ハ土左國へ
行事を王命恐剌並之國ハ出座耶と詠るハ二並の意
ハても有むる今俗ハ二人相對ふを剌向ひと云ひ又
二人ハて爲る事を佐志と云を思ふ可し」と有が如し
此説ハ依れば古事記ハ身一而有面四と有る面四の
内二面宛一番ひて成れるが二並ぶ故ハ二並と云ハ云
ふり右の古事記ハ身一而有面ハ記傳五五丁ハ國名の
分れたる耳ハハ非て本より島形の四ハ分れたる勢

有あるる可し然るる四國かハ分れけめ偖如此人か准
らへて身と云ひ面と云ハ三子島両兒島なども云ひ
山かも傾腹御冨登あども云類あり面ハ万葉二四十一丁
か玉藻吉讃岐國者云〻天地日月與共滿將行神乃御
面と有ハ此を思へるあり」と有が如し傳五面足尊の下及此卷の同
會一面の下か註せるを見合す可し又彼成務天
皇御紀あり山陽曰影面山陰曰背面と有をも思合す
可ふ伊豫國謂愛比賣伊豫ハ弥具(イヤヨロ)かハ非るる其ハ風
土記か伊豫郡自郡家以東比在天山所名天山由者倭
有天加具山自天天降時二分而以片端者天降於倭國
以片端者天降於此土因謂天山也と有るる如く此國土

の具へるが上か天より加具山の降著て弥具ひ成れ
るを以て伊豫郡と成り其より其一國の名と成り其
より一洲の名とハ成れり」事右の大日本の例の如
し神名式か伊豫郡伊豫神社名神大又伊豫三比子命神
社と云も有を記傳か此ハ地名より出たる神名なる
可し」と有ハ然る可し愛比賣ハ其一國の古名なれて又
其國魂神の名なる事上の例の如し此四國を揔て伊
豫二名洲とも負ふ計り主たる國なれば長女(エヒメ)と云義
なる事云も更なり又万葉二か取與呂布天乃皆其山
山とハ別なれども取與呂布と云事由有り與呂布と
ハ外より物を寄せて其を足ハす意なれば伊豫ハ弥

具かて叶ふ可し宜しきを言きとも云へバ與呂を與と云然る可し讃岐國謂飯依比古和名抄ハ佐奴岐と有り名義ハ記傳五六丁ハ古語拾遺神武天皇段ハ手置帆負命之孫造矛竿其裔今分在讃岐國毎年調庸之外貢八百竿是其事等證也と見え臨時祭式ハ凡梓木千二百四十四竿讃岐國十一月以前差綱丁進納と有る此ハ依て竿調國ゝと有ハ動くまじき説なり飯依比古ハ記傳ハ栗國を大宜都比賣と云へバ飯も其ハ由有る神名式ハ鵜足郡飯神社有り」と有り依ハ縁ゆる飯炊其事を神代ハ始なり爲し由ハも有べし其國の式社考ハ飯野山の麓なる東二村ハ在て今飯天神と云り飯依比古の由なり」と云り

飯野山ハ九亀城の東ハ在て俗ハ讃岐の小冨士と云り山なり栗國謂大宜都比賣記傳五七丁ハ栗ハ神代紀ハ栗田神武天皇の大御歌ハ阿波布と詠給ひて古ハ殊ハ多く作り物なり故栗の能出來る國なる故の名なる可し古語拾遺神武天皇段ハ求肥饒地遣阿波國云ゝ此ハ穀麻を殖め爲なれバ肥饒地なるバ栗も能實る可し伯耆風土記ハ相見郡郡家之西北有栗嶋以日子命蒔栗莠實離ゝ云ゝ故云栗嶋也此も栗の嶋名と成れる思合す可し」と有ハ然る事なり万葉三ハ春日之野邊栗種益子とも栗種有世代とも十四ハ安思我良能波姑祢乃夜麻尓安波麻吉丞實登波奈礼留子阿波奈久手安夜思又左都良能乎可尓安波麻伎云ゝなど有り又記傳ハ

和名抄ハ唐韻云粟禾子也和名阿波ト有ハ粟字ハ就れる義なり漢國ハ穀物を凡て粟と云事も有る故なり然れど皇國ハ粟と云ハ一種の名ハ捻て穀ハ自らぬを禾子也と云注を引ながら和名阿波と爲しハ順の誤なり然る言なるが禾子を粟と云も彼土ハ米甚稀なる故ハ其粟を穀物の最上と立る事皇國の瑞穗を尊むが如し此ハ深き所由有ハ就て說有を第一ノ一書淡洲の下ハ云り大宣都比賣ハ同書ハ就て考ふるハ豐宇氣毘賣神の亦名あるを此と同じきハ此ハ此より後ハ生坐し神ハハ坐せども其產土の地ハ緣て國神と成給へる者あり其ハ古語拾遺神武天皇段ハ天冨命更求汝壤分阿波齋部率往東上播殖麻穀好麻所生故謂之總國云々阿波齋部所居便名安房郡今安房國是也と有て東の安房國ハ阿波より聞きたる國なるハ高橋氏文ハ是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉天云々神齋大嘗等供奉始支と有ハ其地ハ坐し安房大神を御食都神と招請しまして其安房大神ハ本國の阿波大神ハて大宣都比賣神なる事御食都神と申せるハて曉る可し偖阿波國の大鳴門と小鳴門の間なる島を大宣山と云るも由有て聞ゆるを神名式ハ美馬郡波尓移麻比弥神社と有ハ四神出生章第二ノ一書ハ軻遇突智娶埴山姫生稚產靈と見えたれバ其御祖母ハ坐り又那賀郡和邪神社和太尓佐意冨曽神社見え和名抄ハ和財郷有ハ丹後

風土記ある和奈佐老夫和奈佐老婦の事か打合たる
ふと如何か見ても同神と所思るあり猶四神出生章
保食神の下か註さむを祝詞講義祈年第七詞大忌祭詞太神宮月次祭詞
等條又中臣壽詞講義第十條か云ふを見合す可し
右の安房大神ハ阿波齋部か本國なりての神を移祭れ
りしなり然るを神名式か安房坐神社名神大月次新
嘗と有る其神なりと云ハ委しからず其ハ古語拾遺
か天冨命於其地立太玉命社今謂之安房社と云て式
か后神天比理乃咩命神社大元名洲神と有れハ其如
くなる事云も更なるが古ハ其阿波大神をも合せて
祀れりしを景行天皇の御代か右の時か京か迎申さ
れしか依て太王命の社と成れるなり其ハ右の氏
文か但云安房大神爲御食神者今大膳職祭神也と有
を以知へし神名式か大膳職坐神三座の中の御食津
神社是なり又御巫祭神八座の中の御食津神を祝詞
か大御膳都神と有る其即大宜都比賣と申すも同

△生筑紫洲ハ古事記か

△神名式か土佐郡都佐坐神社大と有る土佐郡か三世紀へ九ぐハ此ハ菅木一言主神か坐ハ此を土左大神と申すも其ハ土佐郡か在すを以て申ふこと有けれ此神か出たる名ふハ非るなり

意味ある神名土佐國謂建依別土佐ハ處狹ある記
なるを曉る可し
傳五七丁か和名抄土佐郡土佐郷有れバ其より出たる
國名ふる可しと有ゲ如し建依別の建ハ健き意ある
可し佗の三國ハ然耳峻嶮くも非れども此國ハ平
坦ある地ハ少くして山岳多在れバ其義を以て建と
ハ云ある可し（舊事紀か速と有ハ誤なり）依別ハ右の飯依別の例なり神名式か安藝郡多
氣神社今奈半利村か在て嶽大明神と申すを或人建
依別なるむと云れども此ハ安藝國安藝郡多氣神社
名神大と有る同神なるもも知べからねバ佗國より
遷せる神を其國の亦名と爲べくも非れバ今其委し
き事ハ云難し○次△生筑紫洲ハ古事記か次生筑紫島此島者
身一而有面五故筑紫國謂白日別豐國謂豐日別肥國

謂速日別日向國謂豐久志比泥別熊曾國謂建日別と
見えたり此肥國云々を記傳かハ眞福寺本又一本か
依て肥國謂建日向日豐久士比泥別と作れたれども
同書かも此處舊印本及延佳本又一本ともかハ此か引
る如く有る由云われれバ舊事紀かも然有か合せて
右の本共か有面四と有を延佳が頭書か四字可作五
手と有ハ然る言ふるか依て今此を改む古史成文かハ既く右の
如く改められ古史徵か委しき
其誤有れバ必此か見合す可し筑紫洲ハ記傳五九か丁
万葉廿二十八丁か都久之乃之麻と有り此も伊豫の如く
元一國の名より出て總名かハ成れるあり此嶋後か

西海道と云ひ九國と成る北山拔か西之道と有り」と
云われたるが如し有面五ハ筑紫國と豐國と肥國と日
向國と熊曾國と五あり北ハ記傳か云われたる事か
を取れたる故か今ハ日向國ハ有れども其ハ有面四の方
を加へて四を五か改めたり筑紫國ハ記傳五九丁か万
葉五二十三丁か都久紫能君仁と有り後か二國か分れた
り和名抄か筑前筑紫乃三知筑後筑紫乃三知乃久知と有る是ち
り風土記か筑後國者本與筑前國合爲一國と云り如
此二か分れしハ何れの御代とも知られす景行天皇
十八年御紀か筑紫後國と有れバ其より前る將分れ
しハ後なれど前へも及ぶして書る筑紫と云名義

△著島山先代日本の方ニ聯り著る島と云事なる可し鳴を紫と云例ハ垂仁天皇三年御紀ニ但馬國出鳴と有ハ古事記ニ謂ゆる伊豆志なり然れバ洲字の累るニ似たりと雖も對馬鳴と云例も有れハ今試ニ云ふの然れバ出雲風土記ニ島根郡附島と云有り此其例なる可し

△筑後風土記ニ三説有る中の一ニ昔此堺上有廣猛神往來之人半生半死其數極多目曰人命盡神于時筑紫君肥君占之今筑紫君等之祖甕依姫爲祝祭之自尓以降行路之人不被害神是以曰筑紫神と有り此説然も有ぬ可く所思也式ニ筑前御笠郡筑紫神社名神大有り此神なる可し」と云れたるハ甚高き見識なり貝原篤信が和尓雅ニ在御笠郡原田村（所祭五十猛命）と云り或説ニ隣村ニ筑紫村有り昔ハ原田村も筑紫村の内なりしとぞ此社地筑前肥前ニ近き所なりと云り此ニ村名ニ筑紫の名遺れるバ右の風土記の説ニ合るニ就て思ふニ廣猛神を五十猛命の五十を衆廣の事と心得て記るなる可し此ハ悪神の如く聞ゆれども然ニ非ず元より五十猛命と申して御稜威の可畏き神ニ御在し坐けれバ其御祟ありどの烈しく有し時の古事なる可し神の御上ハ其祭祀を乞せ給ふ時ありどの多き事なり偖此社ハ寶叡出現記第四ノ一書ニ初五十猛神天降之時多將樹種而下云遂始自筑紫凡大八洲之内莫不播殖而成青山焉と有り合へれバ必五十猛命なる可し又筑紫てふ名も此ニ起れる事灼然し三代實録ニ負觀元年正月廿七日從五位下筑紫神授從四位下又元慶三年六月八日授從四位下筑紫神從四位上と

と有て何時も筑紫神と称せり又記傳ハ云く風土記の今ニの説も共ハ盡の意ふれど僻事と聞ゆ又私記ハ國形の木兒ハ似たる故と有を世ゝの物知人も用ひたれど此も僻事と聞ゆ又近世ハ貝原某が釋名て云書ハ古異國より寇來るを防むが爲ハ筑前の北方の海濱ハ石垣を多く築せ給ひし故ハ筑紫の意なるむと云る是も由有て思ゆれど異國の賊謂白日別よを防ぐれし事ハ上代ハ無き事なり

以下五國の名ハ某日別と有ハ必天日ハ由有る名ふり合合せて此を説べし白日別ハ灼日別ハ天日の清上りしが灼然なりし由あり豐日別ハ記ハ生女島亦名謂天一根と有ハ天と成れり一根と云事なるが豐日別と云も其如く天日の豐坂登りし謂あるあり又神名式ハ豐後國速見郡火男火賣神社二座と有る此ハ火

ふれども日と火と縁有り速日別の速ハ榮ハて日ハ火なる事次ハ肥國の下ハ云る不知火の事あり豐久士比泥別ハ豐奇火根別ハ天孫降臨章ハ日向捷日高千穗之峯と有る是なり建日別の嶽火別なる可し彼古熊曽と云し今薩摩國の海門嶽櫻島など常ハ烟の立る由なるを思ふ可し大化右の五共ハ某日別と有ハ天日の萌騰りし地の邊なるが故ハ其餘波有て今も九國の山ゝハ常ハ硫黄の氣有て燃るなるハ必火ハ由有るが故なり若くハ伊弉冊尊の火神を生給ひしハ筑紫洲の内なれども有むり其ハ伊弉諾尊の

黄泉國より歸坐し後の身滌ぬ筑紫日向の小戸の橘の檍原に禊ぎ祓ひ給ふ時に生れ坐す神なり其地小生坐るがゆゑを思ひ高天原を所知看す日神も其地小生坐るがゆゑを思ひ亘りて考ふ可き者あり猶筑紫洲の火小申有を云ハ

世六日丙申大宰府言從三代實録小貞觀二年二月
神二社在豐後國速見郡鶴見嶺山頂有三池一池泥水
色青如一池黑一池赤云正月廿日池震動其聲如雷俄而
臭硫黄遍滿國内磐石飛乱上下無數石大者方丈小者
如甕畫黑雲蒸夜者炎火熾沙泥雪散積於數里池中無
出温泉泉水沸騰白成河流山脚道路往還不通温泉之
水入衆流魚醉死者十万數其震動之聲經歷三日と有
り此火男　火女二神ハ四神出生章第二ノ一書小軻遇
突智娶埴山姫と云此より外小思合す事無し又同九
年八月六日大宰府言肥後國阿蘇郡正二位勲五等健
磐龍命神正四位下姫神所居山嶺云五月十一日夜奇
光照耀十二日朝震動乃崩廣五十丈餘長二百五十丈
餘と有り奇光ハ火の事なり漢籍地史ものも倭國有阿
蘇山其石無故火起接天者俗以爲異因行祭禱と有ハ

此方の人の語りを聞て書るなり又續紀廿五小天平
寶字八年十二月此月西方有聲如雷非雷時當大隅薩
摩西國之堺烟雲晦冥奔電交來七日之後乃天晴於鹿
兒島信尓村之海沙石自聚化成三島炎氣露見有如治
鑄之爲形勢相連望似四阿之屋云云と有ハ神名式小
大隅國桑原郡鹿兒島神社大と有り此邊なりて在し事
なり又三代實録小貞觀十六年七月二日戊子大宰府
言薩摩國從四位上開聞神山頂有火自燒煙薫滿天灰
汝如雨震動之聲聞百餘里近社百姓失情求之蒼昆神
願封戸及穢神社仍成此崇勅奉封二千戸と有り此ハ
神崇小依り事なりなども何れも火小依りし事耳なり
を思ふ可く今も肥前國の雲仙嶽肥後國の阿蘇山日
向國の霧島山薩摩國の海門嶽櫻島等の山〻小ハ常
小烟氣の立などをも思ひ彼肥後國小不知火の有ふ
どを思亘し豐國ハ傳四十一小註り如く豐國主尊小
て曉りてよ
由有名なり右小も註り如く天日の萌騰りしハ其國
の速吸名門即其跡りて謂ゆる天一根と云邊なりなど

此大地ハ〳〵も天日か因准ひて一歳の公運晝夜の私運を成る事有る其ハ國常立尊豐雲國主尊の神業か依る事ありて然れハ顯身の目ふとるハ見えざりけれ其、神の靈威を成〳〵給ふ其本處ふるを以て其地方か豐國の名ハ遺れるふる可〳〵豐を饒ひ〳〵大ふる義か用ふるハ此大地の動か依て天日の光を迎へ其天地の氣相感け合て物ハ生出る者ふれハ其を借たる者ふり記傳五十一か豐國ハ登與久迩と訓べ〳〵是も後か二國か分れて和名鈔か豐前止與久迩乃美知乃久知豐後止與久迩乃美知乃之利と有り分れ〳〵ハ何時ゝも知れず」と有り景

行天皇十二年御紀か遂幸筑紫到豐前國と有ハ後名を以て始か及ばせるふる可〳〵國造本紀か豐國造志賀高穴穗朝御代伊甚國造同祖宇那足尼定賜國造と有ハ成務天皇の御代ふるを以知らる右の豐國の名義を記傳か景行天皇御紀ふる右の續の文を引れて冬十月到碩田國其地形廣大亦麗因名碩田也と有を引れて其國の大名を豐國と云も此意ふる可〳〵と云れたれども豐ハ豐大ハ大ふれハ別ふり偖動字の意か豐字を用ひれるハ万葉七か大海之水底肥國ハ記傳五十一か景豐三之浪之云〳〵と見えたり肥國ハ記傳五十一か景行天皇十八年御紀か五月從葦北發船到火國於是火日没也夜冥不知著岸遥視火光天皇問其火光處曰何謂邑也國人對曰是八代縣豐村亦尋其火是誰人之火也

△奏言臣孝德聖命遠誅西戎不而治乃又梟獍自滅自非威靈何得然之更舉燎火之狀奏聞天皇勅曰所奏之事未曾所聞火下之國可謂火國即舉健雄組之勲賜姓名曰火君健緒組便治此國因火曰火國後分兩國而為前後又纏向日代宮御宇大足彦天皇設球磨名贈紫菫巡狩筑紫國之時從葦北火流

然不得主茲知非人火故名其國曰火國と有り此火の事國人の說ふ肥後國の海ふ松婆瀬の澳と云所ふ龍燈と云物の今も有り年毎の七月の末より八月頃迄見ゆる内ふ八月朔日の夜ハ殊ふ多し宇土の邊の山より能見渡さるゝ所り其狀世ふ挑燈と云物の大さふ見ゆる火初ふハ一二顆ゆて其漸くふ分れ數多く成行て盛ふる程ハ幾千万とも知らず大海上竪横三四里ゲ程押並て皆火ふ成り風吹けハ火ふ成て西降夜ハ見えず偖其火の燃る時ふ其海を往來ふ船を遠く見渡せバ火中を行く見ゆるを船ふてハ更ふ火見ゆる事無く唯常の如くあり〻〻 又肥後風土記ふハ肥後國者與肥前國合爲一國昔崇神天皇之世益城郡朝來名峯有土蜘蛛名曰打猿頸猿二人率徒衆百八十餘人薩於峯頂常逆皇命不肯降服天皇勅肥君等祖健緒組遣誅彼賊衆健緒組奉勅到來皆悉誅夷便

應勅而往行前火見直指而往隨勅往之果得著岸天皇下詔只大燎之点此号何界所燎之火亦何火問人奏言此是火國八代郡火邑但不知火主子時天皇詔群臣曰今此燎火是非人火所以号火國知其示由と有を釋ふ引るふハ陳行狀云〻

巡國裏兼察消息乃到八代郡白髮山日晚正宿其夜虛空有火自然而燎稍〻降下著燒此山健緒組見之大懷驚怪行事既畢參上朝廷陳行狀奏言天皇下詔曰剪拂賊徒頗無西眷海上之勲誰人比之又火從空下燒山亦怪火下之國可爲火國〻見えたり有り次ふ彼景行天皇の故事を擧たり其ふ書紀も同じ但國人の對奏せる語ハ此是火國八代郡火邑但未審火由〻と有て于時詔群臣曰燎之火非俗火也火國之由知所以然〻と有り是等を合せて思ふふ火てふ名ハ國ふ在れ邑ふ在れ既く崇神天皇の御世ふ始り〻〻ふり火邑ハ和名抄

ふ八代郡肥伊郷有る是なる可し偖此も二國に分れたり和名抄に肥前乃美知肥後乃美知と有り分乃久知わたるに何れの時とも知られず神功皇后御紀に火前國と見ゆ後に火と云事を忘て肥字に改しなる可し」と云れたる此なて肥國の所由又速日別の所縁をも考合す可し又細注に肥前と肥後とは海の隔りて地接らず正しく二に分れたれば面一に取難き國形なる故考るに右の引る火國の故事は地名に依て皆肥後國の地なり然れば肥國と云しは初は唯肥後の方耳なて肥前の地は本は筑紫國の内なりしが稍後に肥國に属しなや有む肥前は筑前筑後と地接きて此三國は面一なも取つ可き國形なて肥後とは清く離れたれば為に然もやと思ゆる日向國は景行天皇十七年御紀に三月幸子湯縣遊于丹裳小野東望之謂左右曰是國也直向於日出方故号其國曰日向也と有る此意の國名なる事記傳に註されたるが如し然るに日向風土記に景行天皇東望曰是國也東直向扶桑蓋伊豫在日向正東と有は御紀の説と異なるが如く見ゆれども熟見るに伊豫風土記に扶桑と云る大樹の有ける由に云る其に向へるを云るが其大樹に向へるを以て日向と云は違へるに似たれども扶桑は唯喬木の義を取て書るなるに有けれ文の續を以見れば扶桑は必檜木と訓べき字なりけり此木の天進に高く顕れたる梢より

天日の指上れるを見行し坐て日向と號けさせ給へるを文ハ漢籍楚辭ハ日出暘谷浴乎咸池上於扶桑と云を取れる故か何の事とも知るわず成かたけれども其意を得て見る時ハ右の如く灼然なり偖又謂豐久士比泥別と有も天孫降臨章第一一書か筑紫日向高千穗槵觸之峯第二一書か日向槵日高千穗之峯など有る日向ハ國名高千穗ハ山名なて如此く明らかなる上ハ面五と〳〵て其一面を日向國か取べき事決し然るを右の山名其正書か日向襲之高千穗峯第四一書か日向襲之高千穗槵日二上峯第六一書か日向襲之高千穗添山と有ハ共か同し所なるを此なるハハ日向の下か襲と云れば別處と誰も思ふめる事かハ

右れども右の高千穗ハ記傳十五か其山ハ日向國の南の極ふて大隅國の堺なり神代紀か二上と有る如く東西と分れて峯二有り西なる峯ハ大隅國噌唹郡か屬し東なるハ日向國諸縣郡か屬り云〻と云れたる如く兩國か跨れる山なれば一ハ日向と傳へ一ハ日向襲と傳たりし者なり此を以見れば熊曾國と云し日向襲と傳たる隈國なる由なれば何れかしても日向ハ面の一なる事灼し然るを記傳か日向を肥國の城内なる日向と云れたるハ足ぬ事なり肥國の面ハ西海なり日向ハ東を面かしたる國なるを何てかも面の一かハ收むる可けむや又四神出生章第六一書か筑紫日向小戸橘之檍原と筑前國なる說も有れども神功皇后御紀か見えたる神の御諭か筑紫の大名を者として日向國橘門之水底所底而水葉稚之出居と有れば日向國造事灼く又國造本紀か日向國造輕島豐明朝御世豐國別三世孫老男定賜國造と有れば往古より肥國と云ハ別なる者をや熊曾國ハ御紀か人名か能襲と作り隈(北面の)(肥)添國かて日向を表として本として其隈か在國

○て傳十卷二百九十丁ふ云るが如く然
○如くと見えれども其ハ筑前なる
○後名を始か及ぶしも
○き肥後風土記か八球磨贈唹と作た
○て繹か山嶽襲之重之義也と有る限の地をば云名か

（見え又記傳ハ引れたる天孫降臨事ハ舊記之空國自向ハ云ヒ又中哀天皇御紀ハ神の御託言ハ天皇何ぞ熊襲を不服見舊之空國也と有り筑紫ハ背肉ハ云事ハ少て高千穂山と象りて云語ハ云ふと思ふ可ふ有り）

の由ハ其ハ事郡名より廣ク ハ有れども國名ハ有れども後ハ大隅

（云て日向の支國ハ有）

と云を以知べし但上古ハ唯ハ襲と耳云ひ

（見え日景行天皇ニ子ハ日向襲津彦皇子ハ）

右の細注ハ引るハ何れも日向襲と有る是ハ偖曾

（添山ハ二ハ並べ面ハ）

を添と云ハ日向襲之高千穂添山とも云る其東方日

（背）

向ハ（ハニ云）対ひて西方ハ大隅郡（國ハ）贈於郡ハ有ける背向（ソガヒ）

と云べき地形ハ瑞珠盟約章ハ背とも皆上とも有

を古事記ハ曾毘良と見え成務天皇御紀ハ山陽日

影面山陰日背面ハ有を以て襲の義を知べし偖熊

ハ借字ハ て隈（クマ）ハ有て熊野ハ隱野又隈野の意又和名抄

郡名ハ肥後國球磨（クマ）久萬と有を景行天皇十八年御紀ハ

熊縣と見えたる此も隈縣ハ有る事其地理を察しめて

思ふ可し又同（郡名）抄ハ大隅と有ハ字の如く僻隅（クマスミ）の由ハ

ハ又駁謨（五年）と有ハ隱（コモリ）の意熊毛（久米）と有ハ隈毛（クマケ）ハ

ハ思ひ合せて日向の東面ハ對へて隈と云ひ

高千穂峯ハ就て背と云る ハ終ハ國名とハ成れ

者ハ記傳五十七ハ熊曾國と云ハ日向の南方半

國程より大隅薩摩の地迄を摠て云し上代の大名ハ

ハと有ハ然る事ハ物 大隅國造薩摩國造ハ（國造本紀ハ）

有て熊襲國造と云ハ見えざるを以思ふハ既く其國

ハ廢れ し ハ景行天皇御紀仲哀天皇御紀ハ

どゝ其國の背く事有て其より後ゝハ見えざるハ何時と無く日向國ゝ管る事とハ成わるゝあり其ハ天孫降臨章ゝ瓊〻杵尊の御陵を日向可愛之山陵と有ハ和名抄ゝ薩摩國頴娃郡頴娃郷有を以て日向と云名の廣うゝ〻を知べし然れども古ゝ熊襲國と云し邊ゝハ日向襲と後迄も云事ありし者ありて然れとも正しく上古の狀を云時ハ高千穗山を界として其東方ハ日向國其西方ハ熊襲國ゝて在しあり然るを續紀ゝ和銅六年四月乙未割日向國肝坏贈於大隅姶羅四郡始置大隅國と有ハ古ゝ熊襲國と云し邊を分ちて更ゝ大隅國を置わしありけり斯れハ國造本紀ゝ大隅國造纒向日代朝御世治年隼人同祖初ゝ仁德帝代者伏布爲白佐賜國造と有ハ疑ハしき事あり天武天皇十一年御紀ゝ大隅隼人と有れども其ハ未國名ゝハ非ず然れを強て國造本紀を助けて云ハゞ彼日向襲と云けるゝ古の熊襲國造ありし人其大隅郡ゝ住りしゝば其を以て同大隅國造と云なりしゝば後ゝ大隅國と成わるゝ其一國の造としして仕奉わりし者あるゝ可し凡そ日向國と熊曾國の事ハ記傳の說も信ひ難きゝ依て更ゝ云出る者ゝ

○雙生隱岐洲與佐度洲ハ第六第八一書等此ゝ同じ第九一書等ハ次隱岐三子洲次佐度洲と見え第七一書ゝハ次隱岐洲次佐度洲と有て雙生の事無し古事記ゝハ隱岐之三子島亦名謂天忍許呂別と有り但其次序伊豫之二名在ハ錯亂たるゝ可し必津島の後佐度島の先ゝ在べき島と筑紫島との間ゝ有り御紀ゝハ別と筑紫洲の次ゝも吉備子洲の次ゝも伊豫二名洲の次ゝも在て定り無し隱岐ハ記傳ゝ海原の奥中ゝ在るゝ

嶋と云義あるゝ由ハ註されたる簡易(コトスクナ)なて愛たゝ其ハ
唯何と無き海中の嶋を万葉三三十二か三丁ハ奥島六十か三丁ハ奥島清波澈尓云と又奥島荒磯之玉藻十八二十四丁か於
伎都之麻伊由伎和多里氐ゝと詠るゝ如く古人ハ其消
息の任ハ號けたるゝ者ゝて山の深きを奥山と云ゞ如
一記傳ハ口訣ハ奥也西北之隅謂之奥と有ハ似たる
事なゝ漢書ハ係れるゝ故ハ事違へり纂疏の説も
同じ」と、辨るれ三子洲ハ記傳五八丁か今國圖を考る
ゝ然る事なり
ハ先此國四嶋ハ分れたる其中ハ東北方ハ在て大ふ
きを俗ハ嶋(ダウ)後と云ひ其西南方ハ今道五里計離れて
天之嶋向之嶋知夫(ナブリ)嶋とて三有り此三嶋を統て嶋前(ダウセン)

と云あり嶋後ハ比ぶれバ何れも小一三子と云ハ誠ふ
此を以云なるゝ可一」と有ゞ如一和名鈔ハ此國四郡有
ゝ周吉郡ハ右の嶋後なり天之嶋ハ海部郡なるゝ可く
知夫嶋ハ知夫郡なるゝを向(思ふか)之嶋ハ隠地郡ハなるも當れ
りけるゝ此を以考るゝハ此の雙生の説ハ取難きハ似た
りと雖も然しゝす三子洲と云ハ嶋前を母嶋と
立て其嶋前の三嶋ハ三子の
並へゝ狀なれバ(ホホシ)拘るゝ事無一右の天之恐許呂別と云
ゝ恐ハ記傳ハ大の約ハ(り)たるゝなり神代紀一書の熊野
恐蹈命を熊野大隅命と有り此通ふ例なり又凡河内
を大河内とも有り此大を意冨斯と云例なり」と有ハ
て通えたり許呂ハ子等なて右の三子嶋を云なるゝ可

△丁ハ加奈思吉兒呂
我又丁ハ許呂ハ安礼比
毛等人又

△舊事紀ハ熊襲國
調建日別ハ有ラ下ハ
一云佐渡嶋ト有セ也
取テロ訣又元ト集ハ
ハ建日別ト有ルベシ
云ヘモ足ヌ漫言ナリ
次ハ雙生の條ハ引ラ
古事記ハ生兩兒嶋ト
有ハ隱岐ト此ト雙
生給ヘリ記傳ハラ
事記傳の說の如く
ナレハ其ハ下ハ調天皇
屋ト有ラ正ニ佐度の赤名ハ當ラ可キ

丁万葉ハ十四ハ故呂何伊波奈久尓又許呂勢多麻久良又世六ハ兒呂子之毛倍婆又二十八ハ許呂久等曽奈久又二十九ハ兒呂我宇倍尓又兒呂家可奈門往又伊敬乃兒呂波毋又三十ハ安比見之兒良之云ヘト有を仁必波太布礼思古呂之云ヘトアレド此外ハモ猶多在リ此リて許呂ハ許良ハラ事を知ベシ先ハ大凝ラムト思ヒシカモ大ハ凝ヒて聞ユ記傳ハ引れたラ皇太神宮儀式帳ハ鴨神社一處祢大水土兒石己呂和居命ノ己呂モ子等ラ可シ五畿内邊の方言ハ小キ石を石己呂ト云今モ云語ハ

○佐度洲ハ古事記ハ此嶋ハ限リて亦名無ハ傳ヘ漏セリシラ可シ△名義ハ土佐ト同シ意の反さまアラ和て狹處アラ可シ當國の郡名ハ雜太ヽ有ハ好字を著ラれたラリて狹田アラ可アレド思合せて曉ラ可シ記傳五二十ハ此國天平十五年二月ハ越後國ハ併サレ勝寶四年十一月ハ又一國ハ爲ララシ由續紀ハ見ヘたリ」と有ガ如く實ハ越後國ハ屬ラ子洲とも云べき狀アリ其文ハ續紀十五ハ天平十五年二月辛巳以佐渡國併越後國と見元十八ハ勝寶四年十一月乙巳正六位上佐伯宿祢美濃麻呂授從五位下復置佐渡國守一人日一人と有て僅ハ九年程の事アリシラ可シ欽明天皇四年御紀ハ十汝都嶋と有ハ此洲アラ可シ十二月越國言於佐渡嶋北御名部之碕岸云シと有ルバ越國ヨリ管ラ國アラガ如くアレドモ國造本紀ハ佐渡國造志賀高穴穗朝阿岐國造同祖久志伊麻命四世孫大荒木直定賜國造と見ヘたれバ其ハ隣國の事

を傳奏せり〇雙生ハ布多碁尓生給布と訓へ景行
ーなる可ー〇雙生ハ布多碁尓生給布と訓へ景行
天皇二年御紀ハ大碓皇子ハ碓尊一日同胞而雙生と
有る此ハ同じ此ハ記傳五 二十六丁 兩兒嶋の下ハ妙なる
說有り兩兒嶋ハ若くハ書紀ハ雙生隱岐洲與佐度洲
と有る傳を誤りて別ハ一嶋の名と傳へたる者ゝと
有ハ奇しくも考得られたる說なり此ハ就て佐度嶋
の亦名即天兩屋と云て叶へるハ隱岐と佐度と西東
ハ在て兩兒嶋とも天兩屋とも云べき狀なるを隱岐
ハ其嶋の立る地形ハ依て天之忍許呂別と云ひ佐度ハ其隱岐
嶋と相對へるを體ハ取て天兩屋と云者なりけり

諸國の内ハ兩兒嶋と云ハ似著ハしき所無ハ此の雙
生の事を誤傳たる事決ー記傳ハ引れたる古今集朗
顯注ハ明石の沖ハ遥ハ散しある嶋共見え侍り二子
嶋美那保志嶋多礼加嶋鞍懸嶋家嶋など打散たる樣
ハ侍る云ゝと有る二子嶋など云嶋ハ明石門より西
方ハて子が本生の淡路より ハ西北ハ當りて今も然
云ふ嶋共なるが何れも少なる小嶋なれバ其ハ
非る事記傳の說の如ー又肥前國長崎の西南方祝嶋
と云嶋近き海路ハ二子嶋と云て小嶋二並びて有て
云るも其ハ非る事又記傳ハ云れたるゞ如ー又追
考ハ筑前國遠賀郡の海中ハ嶋鄉と云有り東西五里
南北一里ハる嶋ハて二十村有り其中ハ二嶋村と云
有て其所ハ小嶋二有り云く即二子嶋と云なり」と有
も猶決め難ー然れバ右の播磨肥前筑前なる共ハ二
子嶋とハ云へども古事記の兩兒嶋ハ成難ー今も
大和國葛 郡なる二上山を俗ハ二子山と云類なれ
ハ決めて右ハ註せる〇世人或有雙生者象此也ハ記
傳の說の如くなり

（然れども象の字を訓れて因て訓べきなり可し）

者の本注ありと見ゆ但象此と云事心得ず象ハ彼か
在る物の形を圖し取る意なるを世人の雙生ハ素よ
り自然の事なれバ甚謂れ無し同じ事なれども（應）神天皇
紀か初天皇在孕而云へ既産之宍生腕上其形如
鞆是肖皇太后爲雄裝之負鞆と有り下か肖此云阿叡
と有る如くなるまし〻バ其事實か打合て似著ハ
るまし〻然れバ此の象ハ（又ハ）姑く阿由流と訓べるむ
通證か人之一胎擧兩兒亦相似故曰象此と云る或説
の如く似たるを以て象とハ云べるまじきか似たり
莊子か頭圓象天足方象地と云る象も同じ
けれど此方の事を云されバ自然か成なり阿由流ハ
俗か阿夜加理物と云其事なれ彼か在る物の此なれ

も肖て成れるを云なり貫之集又源氏物語などか肖
物と云ひ又後撰集か遊事ハ棚機の女か同じくて裁
縫か方ハ肖ずる有けり又君ぞ世ハ鶴郡か肖て來ぬ
定無き世の疑も無くなど有る是なり然れバ善かも
惡しきかも用ふる語なりけり（拾遺集か風早と峯の
るの易き人の心と云る　ハ肖の活きたる辭なり）○次生越洲ハ第一第六の一書
か在て其他の一書及古事記等かも見えざる事なり
然るを或ハ（北陸道なる）三越加賀能登（の五國）を合せて云ふも云ひ又ハ
佐渡國なりとも云説の有ハ其ハか推量の妄説なり其
ハ北陸道の皆ハ古か越國と云ひ中古か越前越中越

後と分れ又越前より加賀國越中より能登國と成て八ヵ国
て五國か成りしを古か越國と云ればとて此の越洲
とハ成し難し其ハ中山道と北陸道とハ連山相重り
地勢相接して何れを堺とも云べくもぬを水乇か山
脉を以て強て分れたる位の事ハ有ければ中と
か此と彼と洲を合せたる者かハ非れば決て外か求
む可ふり又佐渡國ふりと云も私事ふり若同じ嶋か
む事有べくも〻むかハ同し事を名を替て別とか出されし
非る者をや　此か因て予幼くより此を思ひ思ふと
雖も未得ざりつるを天保十四年九月予京より出羽國か下
りとして加賀國金澤ふる第子某の許か能登國名

勝志を讀て初て此を得たり其説か云く能登國ハ往
古羽咋の潟より能登郡海道を經て内浦田鶴濱石崎
ふど云所海續きりて嶋國ふり時ハ人も住ず有し
か依て怪鳥大蛇の棲處かて有けるを氣多大神此を
退治給ひけるより人家出來て一國と成れる由山
田の龍大明神鷲嶽八幡宮の社傳か遺れり」と有ハ愛
たる古傳ふり偖能登國と云名ハ續紀八か養老二年
五月乙未割越前國之羽咋能登鳳志珠洲四郡始置能
登國と有れば本ハ郡名ふり〻ふり然れば越國ハ前
中後か分れたる當時猶越前國ふりければ往古か

越洲と云けむ程想像る可し氣多大神ハ神名式ハ羽咋郡氣多神社名神大と有て一宮記ハ大己貴命也と見る是なり臨時祭式ハ能登國氣多神宮司准ハ初位官給之以神封と有て杏叚鹿嶋氣比の三社ハ並びて此上無き御崇敬なるも右の如き御功ハ依る事申すも更なり式の通本ハ名神大の三字無ハ誤なり臨時祭式名神祭條ハ氣多神社一座名神大能登國と有ハ依て今補へり續後紀ハ美和元年九月坐能登國正三位勲一等氣多大神宮祝二人始令祀筋と有ハ神宮司ハ此より後ハ置ハ文德天皇實錄ハ嘉祥三年六月戊申能登國氣多大神授從二位又仁壽二年八月癸酉加正二位勲一等氣多大神封戸十烟位田二町と有り又齋衡二年五月辛亥詔曰能登國大神宮寺云々と有ハ職々ハ〻も事ハ有ハども當昔ハ御崇敬の厚りし事を知ハ足なり三代實錄ハ貞觀

〈神名帳頭註ハ社記云天活玉命也と、有ハ此神ハ生國、魂神ハ申せるより混りたるなり此事生島神詞の講義ハ云り

元年正月廿七日能登國正二位勲一等氣多神從一位と見ゆ源順家集ハ能登守ハ成て下る餞する日神の坐氣多の御山本茂くとも別て祈ゝむ君ハ千年を」と有り社傳ハ本殿ハ大己貴命奥社ハ素戔嗚尊稲田姫命なり頂社ハ大己貴命の石像ハて神代より鎮坐す云るハ大穴持像石神社て式ハ見えたる此なる可し三代實錄貞觀二年の下ハ大穴持神像石神と有り又右の名勝志ハ二月初午ハ能登郡能登生國玉比古神社ハ神幸有り二夜在て還幸なり其午日神幸の後ハ必俄ハ地風吹事なり傳云三崎神一宮の御留守ハ迂ゝせ給ふ事と云ふ入昔ハ宿女村なる推葉圓比咩神社ハ宿ゝせ給へるハ後ハ其社ハ替わるなりと云り本ハ推葉を志比志婆能と訓るハ圓の發語なり出雲風土記ハ久志伊奈大美土與麻奴良比賣命有れハ國圓ハ麻奴良と訓べし又出雲風土記ハ亦高志之三崎神の事ハ次ハ云り

都ニ乃三埼矣國之餘有耶見者國之餘有詔而云と引來縫國者三穂之埼也と有る高志之都ニ乃三埼ハ決

く和名抄郡名に能登國珠洲須々と有る是なる可し已に右に引る續紀に珠洲郡と見え万葉十七五十丁に從珠洲郡發船還漂大沼郡云々珠洲能字美尓安佐比良伎之底十八三十三丁に珠洲乃安麻能於伎都美可美尓伊和多利底と有れば古くより須々と云けめども古に都々と云けるが音の通へる任に右の如く成れる為る可し然るずては出雲の三穂之埼より高志之都と乃埼ともに云べき地地は能登の三埼を除て外には非れば為る神名式に珠洲郡須々神社有る此を三埼權現と申と云れば都と乃三埼と有るに叶へり若て万葉十七四十九丁に

能登乃島山と詠るは其頃は已に接ける後なれども海中に此一國の長く張出たる狀を見て古島國なりし事を思ひて詠る者なり右の如く出雲風土記には高志と云ひ養老二年迄は越前國なりしかば其島國なりし古には越洲と云ひも事云も更なる者なりけり猶嶋なりし證とも爲べき其羽咋郡は切門なりし所なるに神名式に相見神社有て伯耆國に會見郡有は出雲國の嶋根郡に對へれば間海なる可し此も其例にて加賀と能登との間海なる事同郡瀬戸地古神社有を以知べし瀬戸には万葉三に迫門と作る如く海と海との間を云なり右等を思合せて往古は越洲と云しは能登國にて有しを後に國接きに成れるなり古名は七九丁に有ず○次生大洲は第六第九の一書には同じく大八洲の列に在れども外

あるが無き事あり古事記かハ故因此八島先所生謂大
八島國然後還坐之時云〻次生大島亦名謂大多麻流
別と有る其然る可し其ハ此紀かハ越洲大洲吉備子
洲など後か一國とも成ざるを大八洲の數か合せなる事あれど此かも第七ノ書ふ
どハ前後の違ところハ有ゆれ古事記と同じきハ正說
あるなと聞ゆ　記傳五二十か周防國大嶋郡ゝ此郡ハ離
れなる嶋なれて今八代嶋と云ひ上關の東安藝の嚴嶋
の西南か在ひ長き今道八九里許横五六里許なる嶋
あり万葉十五十五丁か遇大嶋鳴門而云〻巨礼也已能
名尓於布奈流門能字頭之保尓多麻可流登布安麻子
等女杼毛と詠る此鳴門今も有ひ大畑の迫戸と云て

周防の地と大嶋との間の迫門あり潮満ける時ハ鳴
響甚高くて舟人の怖るし所ありとぞ國造本紀か大
島國造志賀高穴穗朝元邪志國造同祖兄多毛比命兒
穴倭居命定賜國造と有ハ阿岐の次周防の前か載た
れバ皆此大嶋あり後撰集戀一か人知ず思ふ心ハ大
嶋の成とハ無しか歎く頃ろふ同四か大嶋の水を運
びし嶋しの云〻此か同じと有ひて明らあり猶其
次か引九ろ雄略天皇七年御紀か集聚百濟所貢今來手伎於
大嶋中託称候風淹留と見元継體天皇二十三年御紀
か却還大嶋と有も右と同じ可し但此か洲字府ろ

を右ハ嶋と有ハ違へるハ似たりと雖も此ハ大八洲の一ハ取り彼ハ其有る狀ハ依れるが故ハ嶋字を用ひたる者あり通證ハ屬肥前國者と有れども唯大嶋と耳云るハ周防のあるが故なり又記傳ハ筑前國神湊より今道三里北の海中ハ大嶋有り胸形の中津宮と申ハ此嶋なり源氏王鬘卷ハ船人も誰を戀とか大嶋の宇良悲しげハ聲の聞ゆるハ河海抄ハ大嶋筑前國なり鐘御崎の近邊と有り鐘岬の西方ハ當れりと有も此大嶋なり又肥前國松浦郡平戸の東北の方なる大嶋有り肥前の地伊豆壹岐の南なり」と有る此も大洲ハ非ず右等を大嶋と云るハ何の事も無く見たる狀ハ依れるふれば此も大多麻流別ハ大玉有別と云事なりて其陸ハ異なり地なる周防國の由緣ハ依る事なり其ハ和名鈔郡名ハ大嶋玖珂と並出たるも大嶋の海神なるハ合せて其

陸地なる由の名なれば周防を本なりて其子洲なる事決ければ其國を別て一嶋と成れる義を以大多麻流別と云なりけり周防ハ玉を云事ハ和名鈔郡名ハ佐波郡玉祖多萬乃と見え神名式ハ佐波郡玉祖神社と有るも是なり此社如何なりて大社の列ハハ漏給へれども三代實録ハ貞觀九年三月十日周防國從四位下玉祖神從三位と有て神階甚高く御在し又日本紀略ハ康保元年四月二日丁未授周防國座正二位玉祖神從一位と見え今昔物語十七廿三語ハ今ハ昔周防國の一宮ハ玉祖大明神と申す神在す其社

の宮司なて玉祖惟高と云者有ゆゆ云〻など有ハ其社の聞え高〻り〻故なり但此神ハ其なり後ハ成れる神なて此ハ關係〻ぬ事なれども大多麻流別と云ハ玉ハ義有るハ依て云るなり又此國ハ隣れる安藝國なども又思ひ合す可き事有り其ハ國造本紀ハ阿岐國造志賀高穴穂朝天湯津彦命五世孫飽速玉命定賜國造と有ハ明映玉命なる可くム然れバ安藝國と云も玉の明なる義を取れるかと其ハ佐渡國造志賀高穴穂朝阿岐國造同祖久志伊麻命四世孫大荒木直定賜國造と有る大荒木直ハ姓氏錄右京神別天神ハ玉祖宿祢高御年須比乃命十三世孫大荒木命之後也と有も同じ人と思〻く又大嶋國造の次周防國造の前ハ波久岐國造有り延佐ハ頭書ハ波久岐可作與之岐疑今周防國吉敷郡と有ハ然る言なるハ瑞籬朝阿岐國造同祖金波佐彦孫豐玉根命定賜國造と有るも玉ハ依れる名なて寶鏡開始章第二一書ハ玉作部遠祖豐玉者作玉と有る

△此ハ依れハ天湯津彦命の湯津ハ五百箇なて玉と貫連なるなり名なる可ム神名式ハ佐伯郡速谷神社名神大月次新嘗と有ハ其ハ氏社なる可らハ速ハ映て玉ハ緣有り貞ハ觀元年正月廿七日安藝國從五位上速谷神從四位下同九年十月廿三日授安藝國從四位上と有り今平良郷ハ坐て二宮ハ速男明神と申〻云なり

此ハ神名なて別なれども玉を作ハ依て豐玉と云を考合す可なり又阿尺國造思國造伊久國造深羽國造信夫國造白河國造等ハ何れも阿岐國造同祖と有れハ阿岐より支族の別れなるなり右の思國造ハ思得ざれども其外ハ皆陸奥國なて其ハ玉造郡有り又神名式ハ數玉早御玉神社有るも思合す可〻續紀ハ玉作部なる人本國ハ往し見ゆ

○次生吉備子洲ハ第一第八第九一書なも大八洲の列ハ有り古事記ハ生吉備兒嶋亦名謂建日方別と有て大八嶋國の外ハ在る是宜〻右の文ハ然後還坐之時生吉備兒嶋と有を一〻〻て二ハ小豆嶋三ハ大嶋四ハ女嶋五ハ知訶嶋六ハ兩兒嶋と有ゲ中ハ御紀ハ吉備子洲大洲の二を大八洲の列ハ加へられなれども決ハ誤傳なて此を傳へを脫せるハ故ハ事の混れなるなり又此の兩兒嶋と云ハ雙生隱岐洲與佐度洲と有を一の嶋の事と爲るハ古事記の誤なる事右の雙生の下ハ引て註せるゲ如〻然れハ此還坐〻時ハ生給へり〻ハ嶋五なり其ハ小豆嶋ハ

△此嶋の亦名を大野手比賣と云る大野ハ字の通く手ハ高手ハ八十隅手とも云うなり此嶋山岐嶋ハのうずして大なる野を廻なり如ノ云れハ其ハ意ふる可ー

續紀世八か備前國兒嶋郡小豆嶋と有を今ハ讃岐國寒川郡か屬りと記傳か云ハ非なるゲ如ー應神天皇二十二年御紀阿豆枳辞麻の傳か云べけれども先心得置べー△女嶋ハ豐後國直入郡の東北か姫嶋と云て有る是あり此事傳三(四)卷(天一根の事か合せ)も云るを四神出生章第十一書速吸名門の下か合せ説べー知訶嶋ハ釋紀か肥前國也云と有を引て五嶋平戸るどの嶋と惣称ある可しと記傳か註されたるゲ如ー此事敏達天皇十二年御紀血鹿と有る下か云べー亦名を天之忍男と云る忍ハ大なる事上なる隱岐洲の下か云るが如く男ハ峯かて風土記か或有一百餘近嶋或有八十餘近嶋と云も有る如く海中か小山成る嶋こゝ多ー列ふるを以云あり記傳五 二十二下か吉備ハ後か三國か分る和名欽か備前岐比乃美知乃久知備中吉備乃美知乃奈加備後吉備乃美知乃之利と有る是あり吉備中國仁德天皇六十七年御紀か見也此ハ當昔已か三か分れて有ーあり但此後も多く吉備國と耳有り天武天皇御紀上卷か吉備國守あるゝ人見えたるハ三國を統たる守かや又同卷か吉備大宰と云職も見也文和銅六年か備前國六郡を分て美作國を置れたり名ハ桑より出たるゝ可ー和名欽か木美と有れども美と備ハ古常か通ハー云ひ」と有ハ然る言あり小豆嶋ハ小豆か因れる名栗嶋ハ栗か依れる名なるか合せて實か讀(誦)れたり應神天皇二十二年御紀の告備と見え大御歌か吉備那流伊毛嶋と詠せ給ひ古事記鳥津宮段の大御歌か岐備比登等云くとも詠せ給へ(其大鷺昔ハ)(知ハ此嶋も佐かと吉備中國と見え)(朱かなり)安閑天皇二年御紀か備後國欽明天皇十七年御紀か備前の名見えたれば其頃三國か分れたりしあり然れば右の吉備國守ハ何れか一國のみても有べきかとも思ゆれども大宰と有を以見れ

バ三國の守を兼た兒嶋ハ記傳ハ吉備國ハ兒の如く
ハ一者なるべし高津宮段ハ吉備國兒嶋之仕丁
附る故の名なるべし高津宮段ハ吉備乃兒嶋子過而行
と見え万葉六二十四丁ハ日本道乃吉備乃兒嶋子過而行
者筑紫乃子嶋所念香裳と有り後ハ備前國の郡と成
わり欽明天皇御紀ハ備前兒嶋郡と有り和名鈔郡名
ハ兒嶋古之未と有る是なり右の高津宮段なる兒嶋之仕丁を眞福寺本ハ兒嶋郡
仕丁と有ハ却ハ誤なり未其時ハ
郡名を以て称事ハ無り者なり建日方別と云亦名
ハ吉備ハ吉備ハ屬る兒嶋とも云狀なり之後ハ其
國と相接ける地理を思ふハ建ハ更なりて西方ハ
ハ國と嶋との長ける延て接ける由なりて武勇も健も其

勢の進と長るなわバ同ド意なり日方ハ借字なりて干
潟なるべし万葉六三十八丁ハ潮干乃潟乃多頭鳴渡十五
六丁ハ年故能宇良能之保非能可多ハ云くなど有る是
なり然わバ二神の生坐し初ハ干潟と成て國を接
ける給ハむ爲ハ別給へり意を以て其國魂神の如此御
名ハ負ハしなり漸近昔ハ其亦名の如く干潟と成て
相接けるを以て二神の見徹坐し御德の甚可畏き
事を仰奉るべし記傳ハ日方と云風も有り万葉七ハ
東風を日方ハ吹く意を以云るなりて別なり潟ハ字
書ハ海濱潮汐之地也と云るが如し潮の往來ふ地ふ
るふ記傳ハ天日方奇日方命ハ由有べき說も有れど
古事記ハ撫御方命と有る時世も遥ハ後れたる

事ハ如何○由是始起大八洲國之號焉の由是ハ其數八
ハ具ひしるを以云ふの第一一書ハも由此謂之大八洲
國矣と有り古事記ハも故因此八嶋先所生謂大八洲
國と見えたり偖此大八洲國と云名ハ一も二神の此
時より起りしかて唯有の任ハ命ゆきせ給へる者ハ
り四神出生章ハ二神の御言ハ吾已生大八洲國及
山川草木云〻と有を以知べし然れハ葦原中國と云
事ハ古事記の伊邪那岐命の桃子ハ告給へる御言ハ
見えて共ハ古くハ有れども其ハ葦と云物の生巡れ
る後より宣へるあれハ生の任ハ大八洲國と云ゆる
（其中ハ在る國の義を以て）

より ハ猶後の事あるゟ上ハ其ハ天ハ對へて大地の
皆を云りと所思しゆれハ廣くして皇國の總號とも
限らざる事同章第十一一書ハ說を見て知べし（又此の第
一一書ハ有豐葦原千五百秋瑞穗之地と有ハ大八洲
國の嘉號ハ有れども此ハ天孫降臨の時ずり後の
事あるハ此ハ在ハ後の名を先ハ巡りされたるあれ
ども事實ハ叶ハず大殿祭詞ハ大八嶋豐葦原瑞穗之
國と見えたるも大八嶋と云を本りて次ハ豐葦原
瑞穗之國とハ宣へる者りて深く御用意の有る事
ハ寶叙出現章第一一書ハ見えたる神名ハ清之湯山
主而（御）名狹漏彦八嶋篠一云清之撃名（坂）故輕彦八嶋手命
又云清之湯山主三名狹漏彦八嶋野りも申せるを古
事記ハ八嶋士奴美神りも有る共ハ合せて地神本紀ハ

（出雲神寶ハ詞ハ高御魂神魂命能皇御孫命ハ天下大八嶋國ヲ事避奉之時ハ有ハ天下の全ハ此ハ大八嶋國を外國ハ混べきハ文ハ次ハ大八嶋國現事顯事今事避支を有も同じ磐ハ其家ハ譲ハ其家ハ居ハ田畑山林迄を合せたハ事ハ同じく大八嶋國と擧て萬國の意ハ用ハ語ハ）

大己貴神の亦名ハ部ハ此正説ハて共ハ大八洲國を經營給へ義の御名ハ又八千矛神の御歌ハ夜斯麻久ハ都麻麻岐加泥氏と詠せ給へハ是を思ハ可し継体天皇七年御紀ハ句大兄皇子の御歌ハ野絶磨俱ハ都磨ハ祁賀泥底云と詠せ給へハ右の御歌ハ擬ハせ給へハ者ハ神皇承運章第一書ハ所称狭野者是年少時之號也後撥平天下奄有八洲故後加號曰神日本磐余彦尊と有ハ此ハ國號考三下ハ大八嶋國と云號ハ外國ハ對ハず獨立て天下を總云號ハ倭建命の御言ハ吾者坐纒向之日代宮所知大八嶋國天皇と詔給ひ孝德天皇二年御紀詔ハ現爲明神御八嶋國天皇と

詔給ハ公式令の詔書式ハ朝廷の大事ハ用ひらハ詔ハ明神御宇大八洲天皇詔旨と詔給ふと見えたり」と云れたりが如し又孝德天皇白雉元年御紀ハ浄侶四方大八嶋云ハ天武天皇十二年御紀ハ明神御ハ是階下及至千秋萬歳大八洲日本根子天皇勅命者と見え續紀詔ハ多く有ハ事又記傳五二十一丁ハ上件八嶋を生坐ハ序次先淤能碁呂嶋ハて御合坐て淡道嶋偖西へ幸て伊豫之二名嶋次ハ筑紫嶋ハ生坐ハ此へ折て伊伎嶋津嶋を生坐ハ東ハ廻て佐度嶋を生坐ハ南へ歸ハて大倭嶋を生坐ハ如此く其序漫ハ有ハ唯隱伎嶋耳乱て筑紫の前ハ有ハ甚ハ不審ハ故書

紀ニ合せて考るか八嶋の次第彼紀ハ六の異説有れ
ども隱岐ハ何れも佐度の前か在り此記も必然有べ
き者をや舊事紀の八嶋の次第ハ全此記を取て書る
者なるか對馬洲次隱岐洲次佐度洲と有ハ亮叶へり
云〻と有る實か然る言あり又同記か然後還坐之時
る序次も右の如く東より西へ迴坐り先吉備兒嶋ハ
備前なり小豆嶋亦同じく其より西か幸して生給へ
る大嶋ハ周防なり次か女嶋ハ豐後知訶嶋ハ肥前か
り西兒嶋ハ隱岐と佐度とを雙生し給へり事の誤
傳なれば其除きて云ハず又右か引る記傳の詰か淡
嶋の事を云れたれども此ハ淡路の隣なるとも定め
難き説有か依て其を省きたり 偖二神磯馭盧嶋を國中之天柱と爲
て左右か分れ旋り給ひて其天柱の一面か會給ひし

時か陽神の先唱給ひしかに依て祥無りしを推て遘
合ひ爲給へりしかば蛭兒と淡洲とを生給ひけり其
蛭兒ハ三年迄待試ミ給ひしかども葦船生立ざりし
故か流るゝに隨か放棄給へる是今の渡嶋なり次か淡
洲を生給へる此ハ粒〻と其數ハ若干なりしかども
又祥ハしかるざりけれハ淡め坐て共か御子の列か
入給ハざる此即大地か分散ける外夷の萬國共なり
此ハ此章か無き事なれども第一一書及古事記の
傳〻の説かて必斯る可なり此より天神か卜問して
今般ハ陽神先唱へ陰神後か和へ給へる其次序違ハ

ざゆゝしく依て先巡りゝて大八洲國を産給ひ再巡坐て五の嶋〻を生給へるゞ其等ハ各屬る國有て其子洲の如くゝ有けれバ受張て正〻〻國と云物ハ大八洲國耳かゝて即貴御子とも申べき大御國ある者ゆゑ其ハ譬バ二神の御子神等ハ多か坐せとも最後か成坐る天照太神等の神と尊貴御子と御父大神の称擧給ひゝ如く其御德も何も萬神の比か非るゞ故か古語給遺ゝ天照太神者惟祖惟宗尊無二自餘諸神者惟子惟臣誰敢比と有と同〻狀ゆて蛭兒淡洲等ハ此自餘諸神の如く大八洲國ハ天照太神の如く萬國か

君と〻て尊き事二無き者ゆゑ其ハ例共多き事ゆて古事記日代宮段か凡此大帶日子天皇之御子等所録廿一王不入記五十九王并八十王之中若帶日子命與倭建命亦五百木之入日子命此三王負太子之名自其餘七十七王者悉別賜國〻之國造亦和氣及稲置縣主也故若帶日子命者治天下也と〻有る如く二神の國土の尊卑を定給へる狀も又然り万葉五三十か神代欲理云傳久虚見通倭國者皇神能伊都久志吉國言靈能佐吉播布國等加多利継伊比都賀比計理と有ハ神代の古語を云顕ハ〻たる者ゆて作者の心か非る事云も更あるゞ其伊都久志吉國とハ古事記か見え たる二神の互か宣ひ入給ふ御言か愛我那迩妹命と も愛我那勢命と も宣へる愛是ゆゑ彼蛭兒淡洲共の

御子の列に入ざるハ淡め惡き坐に依ての事なるを
如此く愛く〜まれ奉る事ハ〜も夫婦の御序次の善
ハ〜く調ひて御合坐るに依る事なり此大八洲國に
生と生出る人の性に備りて又万葉十三ノ十丁に葦原能
水穂國者神在道事擧不爲國と有ゲ如くかて萬事に
就て美たき可美大御國にあむ有ける彼蛭兒淡洲に
秋の國しハ然〜ず陰神の先言し給へり〜性を愛得
たるゲ故に君臣夫父子夫婦昆弟長幼の序次正〜ク
らざるを以て天神なり聖哲と云者を出し給ひて其
の教訓に從ハ〜めて其行ひを正す事なるハ是も亦
天神の御命を請て改め給へるに依る事なり此事第
一の一書に就て委〜く云事あれども此に事の序に
次る其端を云者なり然るハ始終に亘りて心を着べし
予ゲ說の貫き立つ所此あれば心を着べし

對馬嶋

（此も例に依ハ對馬洲と書る可き嶋と有ハ大八洲の列を除きたるゲ故なり通證に此紀二書所産生者用洲字潮水所凝成者用嶋字と有る意味を以て記されたるゲ故なれども此ハ決く私事なり下に引る天智天皇御紀に對馬國と有るるハ大八洲の一ふる事云也更なり）

ハ第七一書に八壹岐洲の後に對馬洲を出て大八洲の一なり
古事記も其順次なて伊伎嶋の次に生津嶋亦名謂天
之狹手依比賣と見えたる其必然る可し然れば此に
潮沫或ハ水沫の凝成れる由に傳たる其より西方に
る外國共の事に混れつる事其に註せるゲ如し舊事紀に
ハ二處に同ド事の出たる共に大八洲の部に入れる
ハ美たき事なり然れば此を始て一書共の大八洲の
說共ハ異ふり對馬ハ万葉一ノ十六丁に在根良對馬乃渡と
中に有る在根良ハ布根竟の誤なて津と續ける
り然れば古事記なる津嶋其正字なる可し記傳五ノ十九
丁に毛毋布祢乃波都流對馬と訓る如く韓國の往還

△津嶋の假字ハ

の船の泊る津なる嶋なり」と有ハ然る言なり又魏志
籍ハ此嶋の事を對馬國と有り此ハ此方にて津嶋と
云を彼國にて聞傳へ誤て如此ハ書る者なり倭書紀
ハ即此文字を假字ハ取て書りたり對馬と書むハ
然る例なれども有れバ然も有るむを嶋字を添しれ
なるこゝろ心得ぬ嶋〻と重ねて云名ハ有べき事なハ
淡海の海など云例と異なる者をや敏達天皇十二
年御紀ハ津嶋と書れなる所有り是古の書体なり」
と有ハ允恭天皇四十二年御紀ハ對馬と見え天智天
皇六年御紀ハ對馬國と有れども
正〻〻ハ津嶋と書る可き事なり亦謂天之狹手依比
賣ハ伊岐嶋の天一柱と云て男莖形ハ〻て獨立るハ
對せて其國體の女陰なる可ハ就て思ふハ記傳ハ魚
取具ハ纏てふ物も有り」と云れなる其ハ中凹るハ〻
て女陰の形を成〻て用を爲す者なれバ狹手依ハ纏

依なる可や其ハ万葉四十ハ一丁ハ綱兒之山五百章隱有
佐堤乃埼左手蠅師子之云〻と有る其山の五百重ハ
隱れるが纏の狀なるを思ふ可〻但纏てふ物名有て
後ハ佐傳の言有ハ非ず今も俗ハ物を攬寄る事を佐
傳流と云を以知べし然れバ國と成べき物を佐傳寄
て女神の形ハ成せる義の名なる可〻和名抄ハ纏絹如箕形狹後廣
前名也和名佐天と有り万葉一ハ上瀨尓鵜川手立下
瀨尓小網刺渡云〻九ハ三河之洲瀨物不落左提刺尓
十九ハ平瀨尓波左泥刺渡云〻など有る此ハ狹手の
例ハ引耳なり又大伴狹手彦と云人名なるも然り
○壹岐嶋ハ第七〻一書ハ對馬洲の先ハ壹岐洲と有
て大八洲の一なる其正説なる事右ハ註るが如〻古

ムと書く大和物語ハ先帝の五の王の御女ハ一条君と云て京極の御息所の御許ハ侍ひ給ひけり善も非ぬ事有て罷出給ひて由伎の寺の妻ハて在すゝりて云こゝ

事記舊事紀共ハ其如くハて生伊伎嶋亦名謂天比登都柱と見えたり皇極天皇元年御紀ハも壹岐嶋と有て洲字を書るハ外わハ見當らぬども此ハ必對馬も共ふ洲と有べき所あり記傳五十七ハ万葉十五二十五丁二十六丁ハ由吉能之麻と見え和名鈔ハも壹岐嶋由岐と有ハ因て由伎を古訓と思ふ人有れども継体天皇二十四年御紀の歌ハ武賀左屢樓以祇能和馬喇嗚と詠て此記ハも伊字を書き壹字も由の假字ハ非ねば本ハ伊伎ある事明らけし然れども懐風藻ハ伊支連と云姓を目録ハ雪連と作り又彼万葉ハ由吉と有ども以思ふハ必由伎とも通ハて云べき故有る名義り見え

たり行も通ハて伊伎とも云り此も同じ例あり故思ふハ天武天皇五年御紀ハ齋忌此云踰既と有る齋忌ハ伊年伊波布由麻波留由と志伊豆ある様ニハ云言ハて伊と由と通へり斯在バ齋忌も古ハ伊伎と云べし若くハ息長帯比賣命の辛國を征ハ幸行し時ある此嶋ハて神を祭り坐て齋忌の事の有けむ故の名ハも有む齋忌古ハ大嘗ハ限る可らず」と有ハ尤ある説ある其ハ大神宮月次祭又神嘗祭詞ハ由貴御酒御贄ある有を建久行事記ハ唯ハ其奉る物を云すて由貴と耳云るハ神を祭るハ齋

清めて仕奉るが故なり然れハ韓征の御時の例なぞ
有て後か八其渡る人しの此ゐて神を祭鎮めて渡る
事あり〻故か自然か國名とハ成わるるる可し其ハ山を
越るかハ必其坂路ゐて幣を手向て過る事あり〻故
か終〻か(其)手向と云て名の如く成わるるが如し古語拾
遺か天照太神を倭笠縫邑か遷し奉わる時の宴樂歌
か美夜比登能於保與須我良尓伊佐登保志由伎能與
呂志茂於保與須我良尓と有る由伎能與呂志茂ハ齋
の宜しもゐて此ハ唯其祭る事を由伎と云るなり
右か引る万葉一か在根良對馬乃渡〻中尓幣取向而
早還許年と有ハ三野連ある人の入唐時か贈わる歌
ある事を思合せて記傳の説の允當れる事を知べし又
一の考か幸國へ渡るか先此か舟留て息む故か態の
嶋と有ハ天比登都柱と ハ海中か獨立て對馬ある
諾ひ難し（大日本文筑紫ゐハ遠か離わて）
女神か相向る(可)耳かして其佗か相對へる洲國の非

る謂ある事伊豫洲ハ一も飯依比古と愛比賣建日別
と大宣都比賣と夫婦の國二並ぶ故か二名洲と云
を此ハ天之狹手依比賣と唯一並ある事を以て天一柱
と ハ云るなりけり記傳か海中か離て一有る嶋ある
立置而と詠るも柱と云べき由有り神代巻か以磯馭
盧嶋爲國中之柱とも有り」と云れたるを考合す可し
名義比登都柱と云る柱ハ男神の謂ある可し和名
鈔か玉莖男陰名也楊氏漢語抄云屎破前一云麻良云と有る破前
を柱ある古語拾遺か男莖形を袁波是賀多と訓るも
男柱形ある事を思ひ合す可し又天之狹手依比賣と相
對ひて男神と云ハ此神より外か ハ非るなぞ考合せ

て曉る可あり（右の古事記の注に訓矢如矢と有ハ記傳に阿米乃阿麻乃ゐどハ云ず直に阿米某と云を如是ハ註せり下巻檜桐宮段に訓石如石ゐども有り）○對馬嶋壹岐嶋及處〻小嶋皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也と有ハ此章の中にも殊に愛たき古傳なるが中に右の二嶋ハ共に大八洲の一なれば此ハ異なる說に有れども處〻小嶋云〻の事を如此く傳へたるなむ甚〻偉慶〻き神の賜物に有ける鈴屋大人說に處〻小嶋と有ハ必〻も小き嶋耳に限る可らず大八洲の外なるを皆凡て如此ハ云るなれば其中に大なるも多く有ざら〻然れば皇國に屬る嶋〻耳なるべ

諸の外國をも大なる小きを云ず皆此内と爲べきなり」と有ハ彼思兼深き大人にして深く遠く思慮り得るわたる可美說言なりゝ（此ハ記傳五の二十八丁に說なれども餘りに珍〻〻〻所思ゆる故に殊更に其名を出せるなり）偖其處〻小嶋ハ〻も謂ゆる淡洲の事なり其を古來紀伊國と淡路國との間に在る嶋名と心得る事に有れども此ハ何（名も無）と無き小嶋を云名にて皇國の内にも處〻に然る名の小嶋の多在るハ本より謂れ有る事なり二柱神の生坐〻ハ大八洲と又還坐〻時に生坐〻嶋〻とみて古事記に所見たる其數僅に十四を先に生坐〻蛭兒

淡洲以の内両兒嶋ハ傳の誤あるか依て此を除きて
凡てハ其數十五計あるを鎮火祭詞か神伊佐奈伎伊
佐奈美乃命妹妹二柱嫁継給氏國能八十國嶋能八十
嶋乎生給比八百万神等乎生給比氏云々と有るハ此上
無き違ひあり又生嶋神詞か皇神能敷坐嶋能八十嶋
者谷蟆能狭度極鹽沫能留限狭國者廣久峻國者平久
嶋能八十嶋隊事無皇神等能依左志奉故尓云々と有も
亦右か同ど斯れば右の八十國と云ひ八十嶋と云る
ハ此大地か屬る萬國なるべ合ハず然れば右の十
五ハ其數を合せ總たるかて此も彼も云以て行く時

ハ共か歸る所ハ萬國と成ある右の祝詞の文ハ天神
か國能八十國嶋能八十嶋と有る上ハ正しく八十國
の御言なるを其御言
八十嶋なるを誰もしか詞の文なりとして深くも考ざる
ハ麁漏なる事なり予此か委しき說有て已か祝詞講
義か註り但右の八十八十子など古書か云ふ
如く唯數の多き事なり
八十ハ數名かハ非ず八十神八十人
ある事第一ノ一書か註す如く淡洲ハ紀伊國なるを始
めて皇國の國の邊か許多有て其餘ハ此大八洲國
を首ふして其萬國是なり淡洲の淡ハ輕く小き申ふ
り万葉二三十六丁小雫雪者安幡尓勿落と有る安幡ハ淡
かハ非ず又沫かてハ木より非ず安幡ハ小粒なるを
云あり此を勿落ハ禁止めたるハ小粒なる雪ハ却り

て深く積りて大雪と成れるバ有り穀類の粟も右の如くにして味の淡しも耳あるべず其小粒なるを以称ゆなる者なる事云も更なり然れバ阿波の言義ハ大僅（オホシバカ）なる可し大を阿と云事古言ハ多く僅ハ波と約る言ハ非れども凡て波と云言ハしも僅なる義なる事今更ハ云迄も非ず故二神の國生坐し始ハ大嶋と云るハ此大八洲國より（外ハ）無して其餘ハ處〻小嶋ハ有つるなり然るハ漸次ハ潮沫水沫の凝成て形の如く大なる國と成れるども皆其始ハ粒〻と小き淡洲の散（ちり）在なるを基として出來る事故ハ國生の古傳ハ生淡洲と也處〻小嶋と也有て其末の事迄ハ云ざる故ハ此一枚の天地を別なる域として神の御力の及バざる界と爲めり凡皇國より外なる戎共の國〻を理加四ハ（南北の）阿米理加等なるべ其ハ阿自夜ハ西方開け行たる者なるべ阿自夜ハ皇國赤縣印度等を収めたる一大部なるハ阿自夜と淡洲と言の近き我古言を訛れる者と見えて其名義の西洋なるも明らかなるべき由なるて或曰神聖首出之國也なるども或書ハ云り但右等の称ハ天下萬國の君國と有る皇國より命せ給へる名ハ非れバ此を其仕ハ用ひ事ハ皇神等なるも天皇尊なるも恐有り此より西ハ西蕃と云西と云戎と遠西と云狀ハ鼻しめ云べき者なり其より漸くハ凝合て大きく國形を成せる故ハ我が皇神等の御心と彼國神ハ負せて各其地方の言を以て其名を命（マトヨサ）し給へる者と見也寶叡出現章第四ノ一書ハ素戔嗚尊帥其子

五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處云々初五十
猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以持歸之
見之第五一書ハ素戔嗚尊曰韓鄕之嶋是有金銀若使
吾兒所御之國云々有ハ其地方を始て經營給へる
ものゝ口訣ハ素戔嗚尊始開新羅也と有る耳なるず實
ハ萬國を開給ふ（始ハ先立て）始ハ新羅より事始め給ふ事其傳ハ
云を見て知べし欽明天皇十六年御紀ハ百濟國ハ仰
下さゝゝ語ハ原夫建邦神者天地割判之代草木言語
之時自天降來造立國家之神也と有ハ此ハ合せ考る
ハ決く右の二神なる事云も更なり出雲風土記なる

八束水臣津野命の國引文ハ拝袁志羅紀乃三埼矣云
々北門佐伎乃國矣云々と有る佐伎ハ齋明天皇六年
御紀ハ百濟の軍士等が新羅と戰ふハ據任射岐山と
有バ此も百濟の地を云なり如此く外國ゝを御心の
任ハ引寄給ふと云も皆我が皇神等の造給ふ枝國ふ
るを以なり神名式ハ韓國伊大氐神社と申すが意宇
郡ハ二社出雲郡ハ三社有を思合す可くなむ右の八束水臣
津野命と申すハ素戔嗚尊の御事なる由ニ考得たる
說有れバ寶叡出現章ハ就て云べし然れば右の新羅
ハ退城して其大神の天より降坐し由ハ起り百濟と
云ハ其天降り坐し謂なる可く曾尸茂梨ハ其神の在
しゝ地ハ須佐と云地名の皇國ハ多在なる如く曾尸ハ
須佐なり茂梨ハ主なりて其神尸を定め御しゝ謂なる

可し茂梨の主字を書くハ万葉
の此主字を作るを以知べきなり然れども右の新羅或
ハ韓地なども云ハ區別なる名のとる有けれ廣くハ悉
く萬國を指て常世國とハ云ゆるなり寶叡出現章第
六の一書の其後次彦名命行至熊野之御碕遂適於常世
鄉矣亦曰至淡嶋而緣粟莖者則彈渡而至常世鄉矣と
有る是なり右の熊野之御碕ハ出雲國意宇郡の碕なる
る可し其ハ次なる淡嶋の事を伯耆風土記の伯耆國
相見郡と家西北有粟嶋次日子命蒔粟莠嘗離と即載
彈渡常世國故云粟嶋と見えたる此二を合せて云む
の熊野之御碕より出立し坐て粟嶋より渡り坐

八此の淡洲彼の淡洲の相通ふ由の本著て往来る

るなる可きが三五本國考の云ハるる如く我次彦名命
赤縣の天隆し給へる漢名を泰一の子と申すを扶桑
神州より出興し給へるの依て東華大神小童君とも
書眞小童君とも申す由の云ハるるハ然る物の て彼
淡洲の成りる常世の唐戎の國との嘉穀と愛責ふ物
ハ又粟なる事とる奇〻妙なりけれ淮南天文訓の
古之爲度升合量衡輕重生乎天道秋分葉定〻而禾
熟律之數十二葉而當一粟十二粟而當一寸分一寸而
爲十分十寸而爲尺云〻と有る葉ハ高誘注の葉禾穂
粟孚甲之芒也と見え禾ハ說文の嘉穀也以二月始生

八月而熟得之中和故謂之禾云凡禾之屬皆从禾禾有八粟を主と爲が故あり粟八嘉穀實也从鹵从米と有あど皇國の地か八瑞穂の嘉穀あると同じ狀あるを思ふ可し彼土の凡ての穀を粟と云も此より出たる者あり右の如く天地の中和を得たる穀あるあど理窟を附て此上無き穀と爲る事八も其地方か佐住て八他を知ざる故か至極の事ありと思ふ〳〵めども我瑞穂國より見て八又憐れむ可き者あり斯れば淡洲八粟洲にて我が瑞穂國か對へて又萬國を云べき名あるべけれ但二神の初か八未粟あど八非ずして小粒にて多く出來れるが故か淡の悪き坐ての名かも有べけれども又穀の粟も其か八嘉穀と云物にて其地か良八

きあども又奇しき事あり此を以て淡洲か此の處に小嶋にて其郎國能八十國嶋能八十嶋にて潮沫水沫の凝成れる事を知べし但淡と沫とを一か爲べきす淡八阿波沫八阿和にて言異なり猶淡洲の委しき事八第一の一書にて說べきあり　○潮沫之凝成八生嶋神詞か鹽沫能留限と有る是あり此を唯か鹽沫の行留る意にして大地の限を云語と心得る事あれども然しず二神の淡洲と云て處しか小嶋を多く頒給ひて國土と成べき機關を成置給ひけるか潮沫の凝寄て土砂と成り漸次に積り累りて彼礒馭盧嶋の成れる始の如し但其八神代の古昔耳然るか非ず天地の有

の極みハ生國足國と云て人あゞの身の生長ゞ如く
して此國土も生長つ物ふるゞ故か古か小嶋と云し
も今しハ四夷八蠻と皇大御國か屬奉る可き萬國の
許多か成れるを以て猶行末の較略をも想像る可き
者あり此事已か傳五沐蕩尊の下か云り考合す可し
皇國ふハ斯る委しき萬國の古說有を得知ず
て彼と此と異なる天地の如く思い取て正しき神代
の古傳を置て遥ふ遥く成れる外國の妄傳說を信ず
思ふ人も然れば二神の生置すと云ふゞ御子の
有ハ如何 僕
列ふハ入給ひず奴僕の如く駈し給へりを素戔嗚
尊の巡作し給ひけるか大已貴命次彦名命二柱か
事依して經營し給へるを次彦名命ハ常世國か渡

給へりしハ大已貴命ハ此皇國を專造給ひ天神御
子か此國を避奉給へる後か常世國か渡し給ひて
次彦名命と共か歸か坐し事 文 徳天皇實録か所見た
るゞ如し然れども大已貴命ハ大國主神と申して幽
か萬國の主宰と坐ゞ故か生國足國神とも生嶋足嶋
神とも申して二神の御跡を繼て國能八十國嶋能八
十嶋を修り堅め御在るゞ故か此の潮沫凝成者矣の
語を結びて祝詞かハ右か引る如く有ありけり此事祝詞
講義か已か說るを見合て曉る可し然れば此の文ハ
二神の國生の始より大已貴次彦名命の國造の事か
迄係て心得べ
き文ありし○水沫凝而成也と有ハ潮水の泡沫を

云あり潮を水と耳云事ハ古事記身禊段ニ於水底滌時
云〻於水上滌時云〻と見え万葉十九四十ニ丁ニ水上波
地往如久舩上波床座如と詠せ給へるを始として集
中例多り中 右の古事記ある同じ事を四神出生章第六一書ニハ沈濯於海底とも潛濯於潮中
とも浮濯於潮上とも水沫ハ水なれども潮なれども云語あり
有を見合せて知べし 水沫ハ水なれども潮なれども云語あり
神武天皇御紀ニ於是天皇云〻造作八十平瓮天手抉
八十枚嚴瓮而陟于丹生川上用祭天神地祇則云〻譬
如水沫而有所呪著也と有る如水沫而有所呪著也ハ水
沫の朝原ニ依著を呪著と云ふ如くなれども此を加
志理著と訓るハ今俗ニも此より行と物と合て離れざる事を

加自理著と云ハ古言の遺れるなり此水沫の事ハ此
ニ然しも用無けれども加自理著と云事の狀ハ水沫の
凝聚る譬ニ引る耳なり 万葉五ニ水沫奈須微命母六ニ三吉野瀧乃水沫十一ニ是
川水阿和逆纏行水とも鹽滿者水沫示浮 傳五沫蕩ニ尊條
なれども有り水沫ハ美那和と訓べきなり
引る宗像社縁起ニ第一神ハ海淡を集て嶋を築て居
を遠海の奥ニ示し給ふ末世ニ至る迄異國を降伏し
給ふ可き由御誓有て彼嶋ニ留り給ふ即奥御嶋と号
す是日本と高麗との中間ニ有り云〻と有り後人の決
海淡ハ海沫と誤れるなれども
ニ思寄すし説あり此類説ハ色葉字類抄ニ近江國
竹生嶋の成れる事を多淺井姫命與氣吹雄命競勢爭

力更去凡迹下坐海中其下海音云都布〻〻故云都布天
嶋即件神凝水沫而爲磐積風塵而作嶋云〻〻有る此
ハ竹生嶋縁起及帝王編年記などにも出たるを今ハ
其宜しきに隨て引るゞ斯る事ハ自餘の神業かてす
ら右の如く成わる者を況て國生坐し大神等の神業
みして幾千萬の嶋〻云〻も潮沫水沫を寄せ聚めて
成給ふ可き者ありしに今も海邊かて浮石の堅まる
る間に忽に石の質を成すと云ふ潮沫の風の共漂ひ巡
ふ其凝て國〻成迄ハ何千萬の年月をや經たりけ
む其間かハ如何ふる大ふる然わバ淡洲ハ大八洲國
嶋も出來べき者ふるずや
より以前に成わりと雖も其國形を爲す事ハ遥に後

ふる事右の如く偖潮沫の凝て大きく國〻成ハ其
地中に入て隱没ふる淡洲も莫大ふるむを唯神耳ゞ
此を知む

宮内省圖書寮文庫

右自嘉永七甲寅年二月七日始之于時墨夷之騷動幕府之薄弱實是未曾有之珍事也於是予志益固而日夜無怠戰〻兢〻以上爲
朝廷下爲萬世而恥兇虜夷賊屠奸吏之役云尓即四月六日也

（綴此書）

内閣文庫
内閣文庫 清印
明治七年七月九日校了 菅原

国立公文書館
National Archives of Japan